

# ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

XI-2

1984

滋賀県教育委員会

財團 法人 滋賀県文化財保護協会

# ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

XI - 2

1984

滋賀県教育委員会  
財団法人滋賀県文化財保護協会

001-2  
SH 27

## 序

県下のは場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査については、は場整備事業の拡大とともに、その件数も年々増加してきました。こうした状況のもとで、調査が工事と併行して円滑に実施できるよう銳意努力しているところですが、一方、調査件数の増加とともに、種々の資料や成果も年々蓄積されています。それらの成果については、一部をすでに報告したところでありますが、ここに昭和58年度に実施しました発掘調査の報告書を刊行することにいたしました。この報告書が、滋賀県の埋蔵文化財に関する理解を深めていただく一助になれば幸いです。

最後に、この調査に御協力をいただきました地元関係者、関係諸機関および調査員の方々に対し厚くお礼申し上げます。

昭和59年3月

滋賀県教育委員会事務局

文化部文化財保護課長

外 池 忠 雄

## 例　　言

1. 本報告書は、昭和48年度県営埋蔵文化財発掘調査のうち、高島郡今津町構造跡、愛知郡秦荘町毛入堂遺跡の調査成果を収載したものである。
2. 調査は、滋賀県耕地課の依頼により、滋賀県教育委員会の指導のもとに財団法人滋賀県文化財保護協会が実施したものである。
3. 調査にあたっては、地元今津町、秦荘町の役場、教育委員会、今津県事務所、彦根県事務所をはじめ、地元関係者の方々から種々の協力を得た。
4. 現地調査は、本県教育委員会文化財保護課技師兼康保明、同葛野泰樹を担当者とし、財団法人滋賀県文化財保護協会技師紳谷友和、同吉谷芳幸を主任調査員に得て実施した。  
なお、毛入堂遺跡については、秦荘町教育委員会技師林 定信氏にお願いした。
5. 調査に協力を得た諸氏については、各遺跡ごとに記した。厚く感謝の意を表する次第である。
6. 各章の文責は、目次に明記した。

## 目 次

|               |                |
|---------------|----------------|
| 第1章 高島郡今津町構遺跡 | 神谷友和・吉谷芳幸・堀内宏司 |
| 1. はじめに       | (神谷) 1         |
| 2. 構遺跡の調査     | (神谷) 1         |
| (1) A 地区の調査   |                |
| (2) B 地区の調査   |                |
| (3) C 地区の調査   |                |
| 3. 構遺跡・出土遺物   | (神谷) 9         |
| 4. 構遺跡・小結     | (神谷) 11        |
| 5. 井ノ口遺跡の調査   | (吉谷) 11        |
| (1) 調査経過      |                |
| (2) 層位        |                |
| (3) 遺構        |                |
| (4) 遺物        |                |
| (5) 小結        |                |
| 6. 平ノ前遺跡の調査   | (吉谷) 14        |
| (1) 調査の経過     |                |
| (2) 層位        |                |
| (3) 遺構        |                |
| (4) 遺物        |                |
| (5) 小結        |                |
| 7. 北仰西海道遺跡の調査 | (吉谷) 16        |
| (1) 調査の経過     |                |
| (2) 層位        |                |
| (3) 遺構        |                |
| (4) 小結        |                |

|                              |         |
|------------------------------|---------|
| 8. 北仰西海道遺跡の縄文時代遺物 … (堀内)     | 17      |
| (1) 縄文式土器                    |         |
| (2) 石 器                      |         |
| 第1表 構遺跡出土土器觀察表 …… (神谷)       | 21      |
| (図 版)                        |         |
| 第2章 愛知郡秦荘町毛入堂遺跡 …… 萩野泰樹・林 定信 |         |
| 1. はじめ                       | (萩野) 27 |
| 2. 位置と環境                     | (萩野) 30 |
| 3. 調 査                       | (林) 32  |
| (1) 調査経過                     |         |
| (2) 調査日誌 (抄)                 |         |
| 4. 毛入堂遺跡小結                   | (林) 35  |
| (1) 107-A トレンチ               |         |
| (2) 107-C トレンチ               |         |
| (3) 104-A トレンチ               |         |
| (4) 118-A トレンチ               |         |
| (5) 118-C トレンチ               |         |
| (6) 川状遺構                     |         |
| (7) その他トレンチ                  |         |
| 5. 遺 物                       | (林) 35  |
| (1) 遺 物                      |         |
| (2) 小 結                      |         |
| 6. ま と め                     |         |
| (図 版)                        |         |

## 挿図目次

### 第1章 高島郡今津町構遺跡

|                            |    |
|----------------------------|----|
| 第1図 周辺遺跡                   | 2  |
| 第2図 構遺跡トレンチ配置図             | 3  |
| 第3図 構遺跡第7トレンチ遺構実測図         | 4  |
| 第4図 構遺跡第11トレンチ遺構実測図        | 6  |
| 第5図 構遺跡第41・47・49トレンチ遺構実測図  | 8  |
| 第6図 構遺跡出土・陶器・土製品・羽口実測図     | 10 |
| 第7図 北仰西海道・平ノ前・井ノロ遺跡トレンチ配置図 | 12 |
| 第8図 井ノロ遺跡・遺構実測図            | 13 |
| 第9図 平ノ前遺跡土層模式図             | 15 |
| 第10図 北仰西海道遺跡・遺構実測図         | 16 |
| 第11図 北仰西海道遺跡・石器実測図         | 19 |

### 第2章 愛知郡秦荘町毛入堂遺跡

|                          |    |
|--------------------------|----|
| 第1図 毛入堂遺跡位置図および周辺の遺跡     | 28 |
| 第2図 毛入堂遺跡調査地位置図          | 31 |
| 第3図 毛入堂遺跡トレンチ配置図         | 33 |
| 第4図 毛入堂遺跡遺構図および柱状図       | 34 |
| 第5図 毛入堂遺跡107-Aトレンチ北東部遺構図 | 35 |
| 第6図 毛入堂遺跡出土遺物実測図         | 37 |
| 第7図 毛入堂遺跡出土遺物実測図         | 38 |
| 第8図 毛入堂遺跡出土石仏実測図         | 40 |

## 図版目次

### 第1章 高島郡今津町構造跡

- 図版1 全景、1. C地区全景（東より） 2. 今津北小学校北側（東北より）  
図版2 遺構(1)、1. 第7トレンチ（東北より） 2. 第7トレンチ（南より）  
図版3 遺構(2)、1. 第5トレンチ（東より） 2. 第11トレンチ（東より）  
図版4 遺構(3)、1. 第41トレンチ（西より） 2. 第41トレンチ（西より）  
図版5 遺構(4)、1. 第47トレンチ（東より） 2. 第49トレンチ（東より）  
図版6 遺物(1)  
図版7 遺物(2)  
図版8 遺物(3)、1. 弥生式土器、土師器 2. 須恵器坏蓋  
図版9 遺物(4)、1. 須恵器坏身 2. 須恵器無釉陶器、綠釉陶器  
図版10 全景、1. 平ノ前遺跡、北仰西海道遺跡（西南より） 2. 井ノ口遺跡（東南より）  
図版11 遺構、1. 井ノ口遺跡、遺構（北より） 2. 井ノ口遺跡、遺構（西より）  
図版12 平ノ前遺跡・遺構(1)、1. 1号墳（南より） 2. 3号墳（南より）  
図版13 平ノ前遺跡・遺構(2)、1. 第13トレンチ（南より） 2. 第42トレンチ（南より）  
図版14 北仰西海道遺跡・遺構、1. 第102トレンチ（南より） 2. 第102トレンチ（東より）  
図版15 北仰西海道遺跡・遺物（縄文式土器）(1)  
図版16 北仰西海道遺跡・遺物（縄文式土器）(2)  
図版17 北仰西海道遺跡・遺物（縄文式土器）(3)  
図版18 北仰西海道遺跡・遺物  
図版19 構造跡・土器実測図(1)  
図版20 構造跡・土器実測図(2)  
図版21 北仰西海道遺跡・縄文式土器実測図(1)  
図版22 北仰西海道遺跡・縄文式土器実測図(2)

### 第2章 愛知県秦荘町毛入堂遺跡

- 図版1 1. 調査地遠景（東から） 2. 調査地掘削作業風景  
図版2 1. 115-Aトレンチ（北東から） 2. 107-Aトレンチピット郡（北東から）

図版3 1. 118-A トレンチ（北東から） 2. 114-C トレンチ

図版4 1. 118-C トレンチ土器溜り（南から） 2. 104-C トレンチ石仏出土状況

図版5 出土遺物

図版6 出土遺物

# 第1章 高島郡今津町構遺跡

## 1. はじめに

本報告は、高島郡今津町構、北仰・福岡の県営は場整備事業に伴い、昭和58年度に実施した構遺跡、井ノ口遺跡と、工事中不時発見され緊急調査にあたった北仰西海道遺跡、平ノ前遺跡の発掘調査結果をまとめたものである。

構遺跡は、国道161号線より西に位置し、今津北小学校の西側から北側にあたる部分が、本年度の調査対象地である。本遺跡は、城跡の伝承地で、小字名に「城」の地名がみられるが、地表に遺構は認められない。昭和57年度に小学校の南側で、は場整備が行われる際に発掘調査を実施したところ、城に関する遺構は発見されず、年代不詳であるが古代の掘立柱建物が発見されている。

井ノ口遺跡は、昭和57年度の発掘調査で確認された遺跡である。平安時代～鎌倉時代前期の遺物包含層が井ノ口集落の北東に認められるが、その広がりは国道161号線より東へは延びないようである。

北仰西海道遺跡、平ノ前遺跡については、これまでその存在が知られていなかった遺跡である。昭和58年9月に北仰集落周辺で工事中、攢文式土器が出土し今津町教育委員会より県教育委員会に通報があった。県教育委員会では今津県事務所土地改良課と協議し、いったん工事を中止し、遺跡の広がりを把握して後、その取扱いを検討することにした。その結果、遺跡は国道161号線より東側から北仰付近まで、本年度はは場整備実施区域のほとんど全部におよぶことが明らかになった。そのようなことから、遺構を保護するため工事全体の設計変更がなされることになった。

調査は、滋賀県教育委員会文化財保護課技師兼康保明を担当者として、構遺跡は昭和58年7月4日から8月6日までの間、滋賀県文化財保護協会技師神谷友和、井ノ口・北仰西海道・平ノ前遺跡については、昭和58年10月3日から11月4日までの間、滋賀県文化財保護協会技師吉谷芳幸を主任に現地調査を実施した。

なお調査にあたっては、今津県事務所土地改良課、地元平ヶ崎、北仰の方々の協力を得たほか、今津町役場土地改良課、今津町教育委員会社会教育課からも種々御配慮をいただいた。また、本遺跡の発掘調査、整理作業にあたっては、山口順子（滋賀県埋蔵文化財センター）、堀内宏司・服部喜和子（調査員）、氏丸隆弘・小原慎一・西尾幹弘・越智文章・齊藤博文・南 淳一・奥野美香・福井真理子・井上 誠（追手門学院大学）、森下直子（仏教大学）、寿福 澄（遺物写真）、深田ます子・宮川きよ子の諸氏の協力を得た。記して厚くお礼申しあげたい。

## 2. 構遺跡の調査

本年度発掘調査を実施した地点は、は場整備による削平の関係から3地区に大別され、しかも各々の地域で遺跡の内容を異なるため、以下便宜上A地区・B地区・C地区として順に報告を行う。

### (1) A地区の調査

今津北小学校の西方に位置し、標高97m程である。10ヵ所にトレンチを設定した結果、南北方向に配列する第1～7トレンチでは、基本層位が上層より、耕土、床土、暗灰褐色粘質土、暗茶褐色粘質土、暗灰色粘質土、淡黄褐色粘質土であり、遺物包含層は確認できなかった。

東西方向に配列する第7～9トレンチの基本層位も同様である。南北方向の第1～7トレンチは標高97m程のほぼ等高線上に位置するが、東西方向の第7～9トレンチでは、東方に行くにしたがって下降し、第9トレンチでは標高96.2m程となり、約1mの比高差がみられる。遺物包含層は確認できなかったが、上層より若干の遺物片が検出された。



### 第1図 周辺遺跡

1. 酒波寺遺跡 2. 日置前B遺跡 3. 波渡東古墳群 4. 酒波三ツ又遺跡 5. 新田古墓 6. 日置前遺跡 7. 王塚古墳群 8. 妙見山古墳群 9. 構遺跡 10. 平ノ前遺跡 11. 北仰山西道遺跡  
12. 興福寺遺跡 13. 白米塚遺跡 14. 北仰遺跡 15. コクリュウ寺遺跡 16. 井ノ口遺跡 17. 井ノ口  
中川原遺跡 18. 心妙寺遺跡 19. 倉堂寺跡遺跡 20. 高田館跡遺跡 21. 杉沢遺跡 22. 弘川B遺跡  
23. 弘川A遺跡 24. 中川原遺跡 25. ミヨシ塚遺跡 26. 荘積塚遺跡 27. 將軍塚遺跡 28. 女郎塚遺跡  
29. 大拱古墳群遺跡 30. 大拱遺跡 31. 山塚遺跡

第7トレンチの淡黄褐色粘質土上面で、直径20cm程の灰色粘質土を覆土とするビットを検出した。同じく、第2～4トレンチでは、幅2m、深さ30cm程の淡青灰色粘質土を覆土とする溝を検出した。おそらく、第7トレンチで検出された溝<sup>1</sup>が、南北方向に連なるものとを考えられる。

第7トレンチでは、淡黄褐色粘質土上面より土坑やピットなどの遺構が多く検出されている。以下、個々の遺構について順次述べておこう。

溝1 第7トレンチの西端で検出された。第2~6トレンチで確認した溝と同じである。幅4.8m、深さ30cm程で、上層は淡青灰色粘質土、下層は褐色砂（鉄分の沈殿層）である。溝の中央部が一段下っており、そこには褐色砂が堆積し、溝も多く含んでいる。

遺物は上面より、白磁(68)、青磁(69)と上層より土師器の小皿(1・6)、壺(11)や、須恵器の壺、甕、無釉陶器(10)などが出土した。

溝2 土坑1～3の東側に位置し、幅45cm、深さ10cm程度で、茶褐色粘質土を覆土とする南北にのびる溝である。断面はU字状をなし、遺物は含まれていない。

溝3 トレンチの北側に位置し、幅70cm、深さ30cm程で、淡青灰色砂を覆土とする円弧状の溝である。断面は逆台形状をなし、溝物は含まれていない。

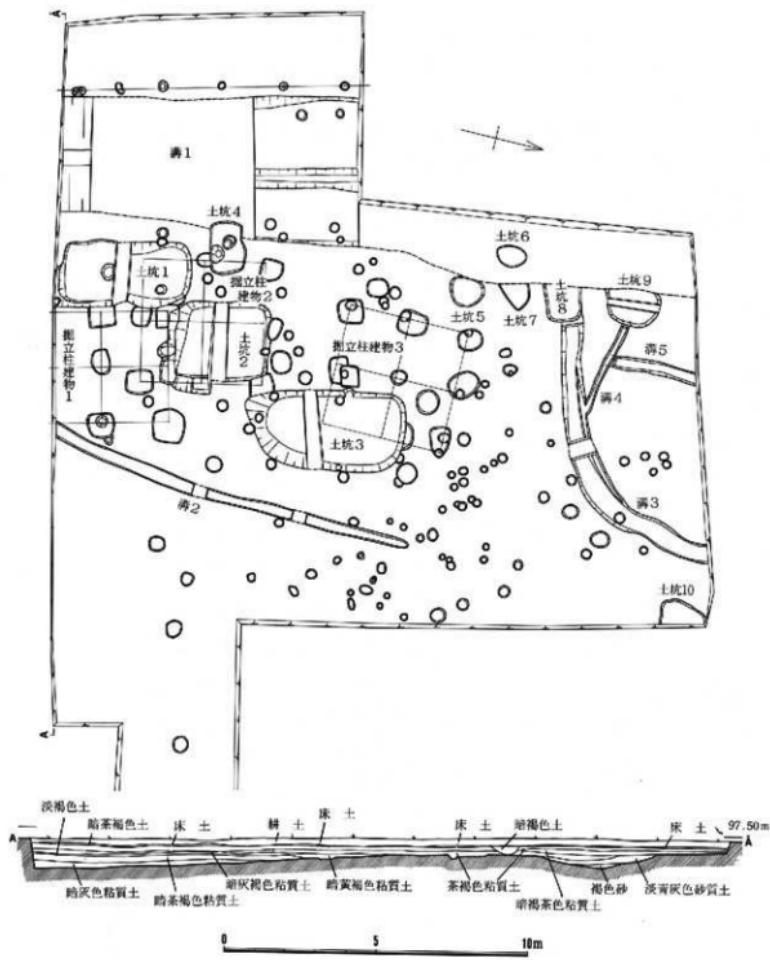
溝4は、溝3との重複関係よりみて溝3よりも古い。幅20cm、深さ10cm程で、暗茶褐色粘質土を覆土とする。断面はU字状をなし、遺物は含まっていない。

溝5 溝4との先後関係は明確ではない。幅30cm、深さ10cm程で、暗褐色粘質土を覆土とする。断面はU字状をなし、遺物は含まれていない。

**土坑1** 南壁付近に位置し、 $2.1 \times 4.2\text{m}$ 、深さ30cm程度の限丸長方形状の土坑で、暗茶褐色土を覆土とする。壁面は、ゆるやかに床面におよび、床面も比較的平坦である。遺物は、北半部の覆土より、土師器の小皿



第2図 構造跡レンチ配置図



第3図 構造跡第7トレンチ遺構実測図

(7)や須恵器の甕などが出土している。

**土坑2** 土坑1の北東側に位置し、 $2.6 \times 3.4\text{m}$ 、深さ40cm程の限丸方形状の土坑で、暗茶褐色土を覆土とする。壁面は、ゆるやかに床面におよび、床面は小さな起伏を全体にもっている。遺物は、北半部の覆土内より甕(66)、天目茶碗(9)が出土し、甕(66)は西壁付近に集中していた。

**土坑3** 土坑2の北東側に位置し、 $2.7 \times 5.0\text{m}$ 、深さ25cm程の長楕円形状の土坑で、暗茶褐色土を覆土とする。壁面は、ゆるやかに床面におよび、平坦な床面である。遺物は、北半部の覆土内より土師器の小皿(2・4)、羽釜(14・15)などが出土した。

**土坑4** 土坑1の北側に位置し、 $1.7 \times 1.1\text{m}$ 、深さ10cm程の限丸長方形状の土坑で、暗茶褐色土を覆土とする。ゆるやかな壁面と平坦な床面をもつ。遺物は含まれていない。

**土坑5** 溝1の東側に接する位置にある。直径1m、深さ10cm程の楕円形状の土坑で、暗茶褐色土を覆土とする。床面は平坦であり、すり鉢状をなす。遺物は含まれていない。

**土坑6** 溝1の上面で検出した、 $0.7 \times 1.0\text{m}$ 、深さ20cm程の楕円形状の土坑で、すり鉢状をなす。褐色粘質土を覆土とするが、覆土はたいへん粘質が強いもので、遺物は含まれていない。

**土坑7** 溝1に一部を削平された、直径1m程の楕円形状の土坑で、暗茶褐色粘質土を覆土とする。完掘できなかった。遺物は含まれていない。

**土坑8** 溝1に一部を削平された、短辺1.2m、深さ10cm程の限丸長方形状の土坑で、暗茶褐色土を覆土とする。床面は平坦である。遺物は、土師器の小皿(3・5・8)、羽釜(13)や須恵器の甕などが出土している。小皿5は、床面上に伏せた状態で出土した。

**土坑9** 溝1に一部を削平された、 $1.2 \times 1.7\text{m}$ 、深さ15cm程の限丸長方形状の土坑で、淡黒灰色粘質土を覆土とする。床面は平坦であり、遺物は含まれていない。

**土坑10** トレンチ内の東北限に位置する、 $1.2 \times 1.0\text{m}$ 、深さ20cm程の限丸長方形状の土坑で、暗茶褐色土を覆土とする。床面は平坦であり、遺物は含まれていない。

**掘立柱建物1** 南壁付近に位置するN-12°-Wの軸方向をもつ、2間×2間の建物で、倉庫跡と考えられる。掘方は大きく、60cm~1m程あり、柱は直径30cm程と推定される。

**掘立柱建物2** 土坑2に一部削平された、N-11°-Wの軸方向をもつ2間×2間の建物で、やはり倉庫跡と考えられる。掘方は、60~80cmの大きさである。

**掘立柱建物3** 土坑3に一部削平された、およそ南北に軸方向をもつ2間×2間の建物で、1・2と同様に倉庫跡と考えられる。掘方は、50~90cmの大きさである。

各遺構の先後関係は、掘立柱建物1~3が古く、次に土坑1~10が続き、溝1が最後に廃絶したものと考えられる。

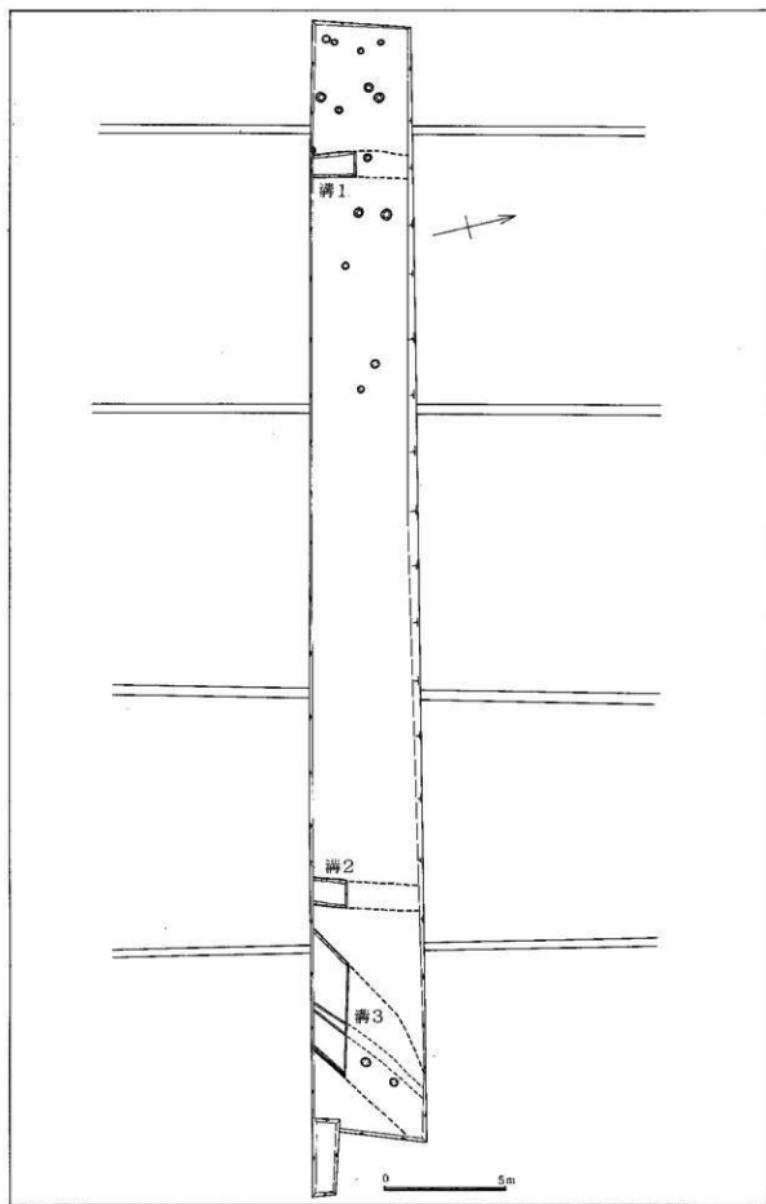
## (2) B地区の調査

今津北小学校の北側に隣接する一帯であり、トレンチを12ヶ所設定する。東西方向に配列する第11・19・21・22トレンチの基本層位は、上層より耕土、床土、黄褐色砂礫土、茶褐色粘質土であり、その下面是砂礫層である。遺物包含層は検出されていない。

南北方向に配列する第11・13・14・15トレンチの基本層位は、上層より耕土、床土、暗灰色土、暗灰褐色粘質土、淡青灰色粘質土、茶褐色粘質土であり、耕土と茶褐色粘質土の間に3層が加わり、東西方向で確認した黄褐色砂礫土は、ブロック状であったと考えられる。第12・16・17・18・20トレンチも同様の層位を示すものであり、遺物包含層などは確認できなかった。南東に位置する第22トレンチが、標高93.9m程と最も高位を占め、第22トレンチの北方、西方に行くにつれ下降し、比高差は約1m程ある。

各トレンチとも、遺構、遺物はほとんど検出できず、第11トレンチでのみ確認できた。

**溝1** 幅1m、深さ10cm程の暗茶褐色土を覆土とする、南北にのびる溝である。断面はU字状をなし、遺物は含まれていない。



第4図 構造跡第11トレンチ遺構実測図

溝2 幅1.1m、深さ20cm程の淡茶褐色粘質土を覆土とする、南北にのびる溝である。断面U字状をなし、底面は平坦である。遺物は弥生式土器の高杯や土師器の小皿の小片が出土している。

溝3 幅3.5m、深さ10cm程の茶褐色粘質土を覆土とする南北～北東にのびる溝である。底面は平坦であるが、中央部に平行して一段低い部分が確認できる。覆土は、砂質・鉄分を多く含む。遺物は、土師器の小皿の小片が出土している。

### (3) C地区の調査

C地区はB地区に接する一帯であり、トレンチを19ヶ所設定する。東方に南北に配列する第31～34トレンチは、標高約93mの等高線上に位置し、基本層位は上層より耕土、床土、灰色粘質土、黄灰色粘質土、淡灰色粘質土、暗灰色粘質土であり、遺物包含層は検出できなかった。

中央付近に設定した第35～38トレンチは標高94mに、第39・40トレンチは標高94.5m程の等高線上に位置し、基本層位は上層より耕土、床土、茶褐色粘質土、淡茶褐色粘質土であり、遺物包含層は検出できなかった。西端に南北に配列する第42・43トレンチは標高94.5m程に、第44～46トレンチは標高95m程の等高線上に位置し、基本層位は耕土、床土、茶褐色粘質土、淡青灰色粘質土（ブロック状に見られる）、淡茶褐色粘質土であり、第35～40トレンチと同様の層位を形成しているが、第42～46トレンチでは土層内に小砾を多く含んでいる。遺物包含層は検出できなかった。

C地区では、第41・47・49トレンチで遺構と遺物を検出した。以下、各トレンチ別に詳述する。

#### 第41トレンチ

南北12m、東西32mのトレンチで、層位は上層より耕土、床土、淡茶褐色粘質土、暗茶褐色粘質土であり、暗黃褐色粘質土上面より遺構を検出した。

土坑1 一边2.6m程の隈丸方形状の土坑で、暗茶褐色粘質土を覆土とする。覆土には砂礫を含み、床面は中央部分がわずかばかり低くなっている。土坑内の中央に位置する石は、焼成をうけている。覆土中より、土師質の環状土製品(64)や須恵器の鉢、陶器片などが出土している。

土坑2 3.3×2.1m程の長梢円形状の土坑で、暗茶色粘質土を覆土とする。床面は平坦であり、一部わずかばかり低くなっている。遺物は覆土内より、土師器の小皿や須恵器の壺片が出土している。

土坑3 2.1×1.8m程の隈丸方形状の土坑で、暗茶色粘質土を覆土とする。床面は平坦である。遺物は覆土内より陶器片が出土している。

土坑4 土坑2に一部を削平された、径1.2m程の梢円形状の土坑で、茶褐色粘質土を覆土とする。床面は平坦である。

土坑5 北側をトレンチの壁と排水溝によって削平された、一边1.4m程の方形状の土坑で、暗茶色粘質土を覆土とする。

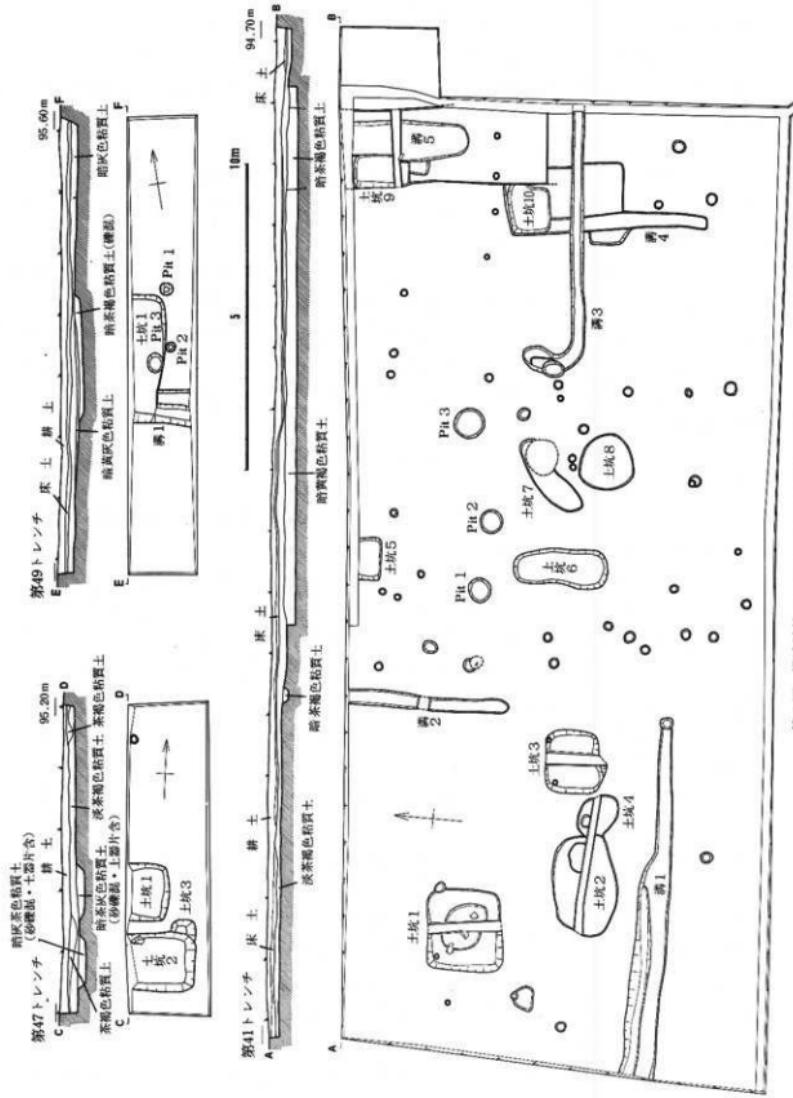
土坑6 1.2×3.2m程の長梢円形状の土坑で、暗茶色粘質土を覆土とする。

土坑7 0.8×2.8m程の長梢円形状の土坑で、暗褐色粘質土を覆土とする。

土坑8 直径1.8m程の円形状の土坑で、暗褐色粘質土を覆土とする。

土坑9 1.1×1.6m程の長方形状の土坑で、暗茶色粘質土を覆土とする。底面は比較的平坦であり、覆土内より須恵器の壺蓋(30)、壺身(52)、皿(42)、壺などが出土している。

土坑10 1.2×1.6m程の長方形状の土坑で、暗茶色粘質土を覆土とする。床面は平坦であり、覆土内より土師器の皿や須恵器の壺蓋(31・75)、壺身(44・51)、壺などが出土している。壺蓋(31)は、天井部外面に墨書きをもつ。



第5圖 構造地図第41・47・49トレンチ遺構実測図

**ピット** 土坑5と土坑6・7、8の間にみられるピット1～3は、暗褐色茶色粘質土を覆土とする直径70～90cm程のピットである。ピット1の覆土内より、土師器の皿(25・26)や須恵器の皿(37)や縁物(57)が出土している。

**溝** 細い溝が5条検出されている。そのうち、溝5は幅1.2m、深さ20cm程の淡黒褐色粘質土を覆土とする、南北にのびる溝である。底面は平坦であり、覆土内より須恵器の壺蓋(34・35)、甕(54)やフイゴの羽口(65)が出土している。

#### 第47トレンチ

第39・40トレンチの北側に設定した、東西2.6m、南北10m程のトレンチで、層位は上層より耕土、床土、茶褐色粘質土、淡茶褐色粘質土であり、淡黄褐色粘質土上面で遺構を検出した。

**土坑1** 一辺1.8m程の方形状の土坑で、暗茶灰色粘質土を覆土とする。壁面はゆるやかに床面におよび、床面は平坦である。覆土内には砂礫を多く含み、遺物は土師器の小皿や甕、須恵器の甕の小片を含んでいる。

**土坑2** 2.0×2.2m程の隈丸方形状の土坑で、暗茶灰色粘質土を覆土とする。床面には弱い起伏がみられ、北壁付近から石が出土したが流入したものと思われる。遺物は、土師器の小皿や甕の小片が出土している。

**土坑3** 一部を土坑2に削平された、直径80cm程の円形状の土坑で、暗褐色粘質土を覆土とする。形状はすり鉢状をなすが、床面で平坦になる。遺物は含まれていない。

**ピット** 北西限で直径20cm程の、暗茶色粘質土を覆土とするピットを検出した。遺物は含まれていない。

#### 第49トレンチ

東西2m、南北15m程のトレンチで層位は上層より耕土、床土、暗灰色粘質土であり、淡黄褐色粘質土上面より遺構を検出した。

**土坑1** 一辺4.2m程の隈丸方形状の土坑で、暗茶褐色粘質土を覆土とする。床面は、南側に傾斜する。覆土内に小砾を含み、遺物は含まれていない。

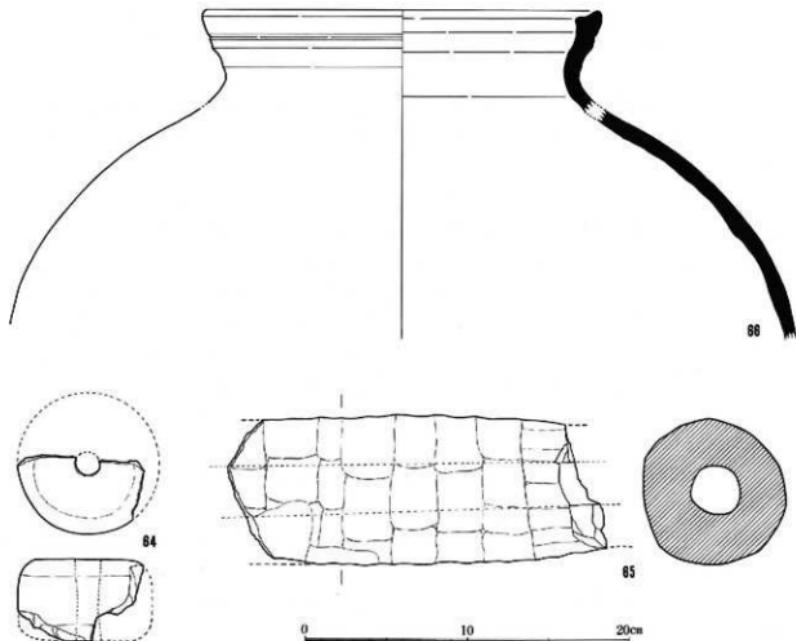
**溝1** 一部を土坑1に削平された、幅1.2m、深さ20cm程の東西にのびる溝で、暗褐色粘質土を覆土とする。北岸より南にゆるやかに傾斜するU字溝で、小砾を含んでいる。遺物は、土師器の甕や須恵器の甕の小片を含んでいる。

### 3. 構造跡・出土遺物

A地区では、第7トレンチを中心として、中世 鎌倉時代の遺物が出土している。

土師器の小皿は、この時期の当方で一般的なもので、口縁部の形状にややバラエティがある。口縁端部が直立気味のもの(1・6～8)と外反するもの(2・3・5)、内傾し丸くおわるもの(4)などわずかに差異が認められる。羽釜は3種類あり、くの字状に外反する口縁部をもち、端部を内側に折り返し丸くおわるもの(13)、弯曲しながら内側上方にのびるもの(14・15)、直立気味にのびるもの(12)がある。このうち(13)は、県内に類例のないもので、菅原正明氏の羽釜分類の大和B型に含まれるものである。同時期の陶磁器としては、口縁部の一部で端部を欠損した白磁碗(68)や、外面に唐草文様をもつ瀬戸の瓶子(70)の胴部などがある。

新しい時期の遺物としては、天目茶碗や陶器の甕などがある。天目茶碗(9)は国産のもので、口縁端部が尖り気味に外反し、胎土は精良で焼成の硬質なものである。天目茶碗と共に伴した陶器の甕(66)は、口径24.2cm、器壁の厚さ1.0cmで、直立気味の口縁部に丸味をもつ体部が続く。器体は、表面が剝離している。その他、同時期と思われる遺物に、青磁碗(69)がある。青磁碗は底部であるが、高台を欠失している。外面に蓮弁をもち、みこみに壓押しの文様をもつ。



第6図 構造跡出土・陶器・土製品・羽口実測図

B地区では、少量の土師器片に混って、弥生式土器（後期）～古式土師器が出土している。同時期の遺物は、C地区からも若干出土している。(16～18)は、B地区第11トレンチから、(19・20)はC地区第41トレンチの遺構検出面から出土した。壺(16)、甕(19)は口縁部外面に円線文を施し、甕(17)は擬凹線文をもつ。

C地区では、奈良時代末期～平安時代前期にかけての遺物が出土している。

土師器には碗(28)、杯(25・26)、皿(27)、高盤(21)、杯蓋(29)などであり、すべて胎土は精良で、色調は淡赤橙色を呈するものが多い。高盤の皿部にのみ、内面に放射状暗文がみられる。蓋は、須恵器の蓋を模したもののように、手法は器体が磨滅していくて不明である。

須恵器には、皿(37～39)、杯蓋(30～36)、杯身(40～42)、高台付杯身(43～52)、小形壺(53)、壺(62)、甕(54・60・61)、鉢(63)などが出土している。杯蓋には大・小があり、(30)は口径25.7cmの大形品である。小形品には、器壁が薄く天井部が水平の杯蓋A(31～33)と、器壁が厚く天井部に丸味をもたせた杯蓋B(34～36)がある。杯蓋Aは、天井部外面にヘラ削りを施すが、杯蓋Bは横ナデのみであるという手法上の差異がみられる。杯身のうち高台付のものには、口縁部が直線的にのびる杯身A(43～47)と、口縁端部を弱く弯曲する杯身B(49・50・52)とに区分され、杯蓋Aと杯身A、杯蓋Bと杯身Bが組合わさると考えられる。杯蓋・身Aは、畿内や近江で一般に認められるものであるが、杯蓋・身Bは特異なもので、形態などに地方色がうかがえ、あるいは若狭・越前方面からの搬入を考慮すべきものである。量的には、Aが多く、Bは少量にすぎない。

綠釉陶器の碗(55～57)や、無釉陶器の碗(58・59)は量は多くない。この遺物群の中では、新しい時期に位置

づけられよう。

注目すべきものとしては、墨書き器が3点(31・51・78)出土している。墨書きの位置は、杯蓋の天井部(31・38)と杯身底部外面(51)で、文字は(31)が「持」(?)と読める以外、不鮮明で判読しがたい。

土製品には、用途不明の環状土製品(64)と、フイゴの(65)羽口が出土している。(64)は、直径8.7cm、厚さ5.0cm、孔径1.5cmあり、半分程欠損している。二次的に火はうけていない。(65)は、現存長21.0cm、直径8.9cm、送風孔3.0cmで、溝5の上層部より出土した。

#### 4. 構遺跡・小結

構遺跡の奈良時代末期～平安時代前期の遺構は、構造からみてA地区第7トレンチの掘立柱建物がそれに該当しよう。調査した3棟の建物は、いずれも仓库跡で、各々主軸方向が異なるが、掘立柱建物1と2は一部重複するものであり、建替えられたものであろう。

遺物については、やや離れたC地区第41トレンチより比較的まとまって出土している。遺物にやや時期幅があるとはいいうものの、土器の出土量は少なく、大半が須恵器で占められていることは注意すべきであろう。また、煮沸器がほとんど無いことも、本遺跡の遺構の性格を反映しているのではないかと思われる。

構域の遺構については、今回も明らかにすることができなかったが、しいてあげれば本遺跡の室町時代の遺物を含む遺構が城に関係するかもしれないが断定はできない。

#### 5. 井ノ口遺跡の調査

##### (1) 調査経過

今回の調査は、昭和56年度に県営は場整備事業に伴い実施された、構・コクリュウ寺遺跡の発掘調査の際、未着手であった場所を対象に行った。

##### (2) 層位

平均的な層位は、第1層・耕作土、第2層・土壌、第3層・黄褐色粘質土、第4層・暗褐色粘質土（一部砂礫層）となり、遺構は第4層を切り込む。遺構面は標高97.34m前後である。遺構のはほとんどは、第4層の砂礫層を切り込んだ状況で検出された。

##### (3) 遺構

今回検出された遺構は、掘立柱建物2棟、櫛1条、溝1条、土坑6基と柱穴と考えられる多数のピットである。

掘立柱建物 SB 1は、3間×2間以上の建物で、柱間は検出された部分は、1.8mの等間である。SB 2は、桁行2間、梁行1間の南北棟で、柱間は1.3mを測る。

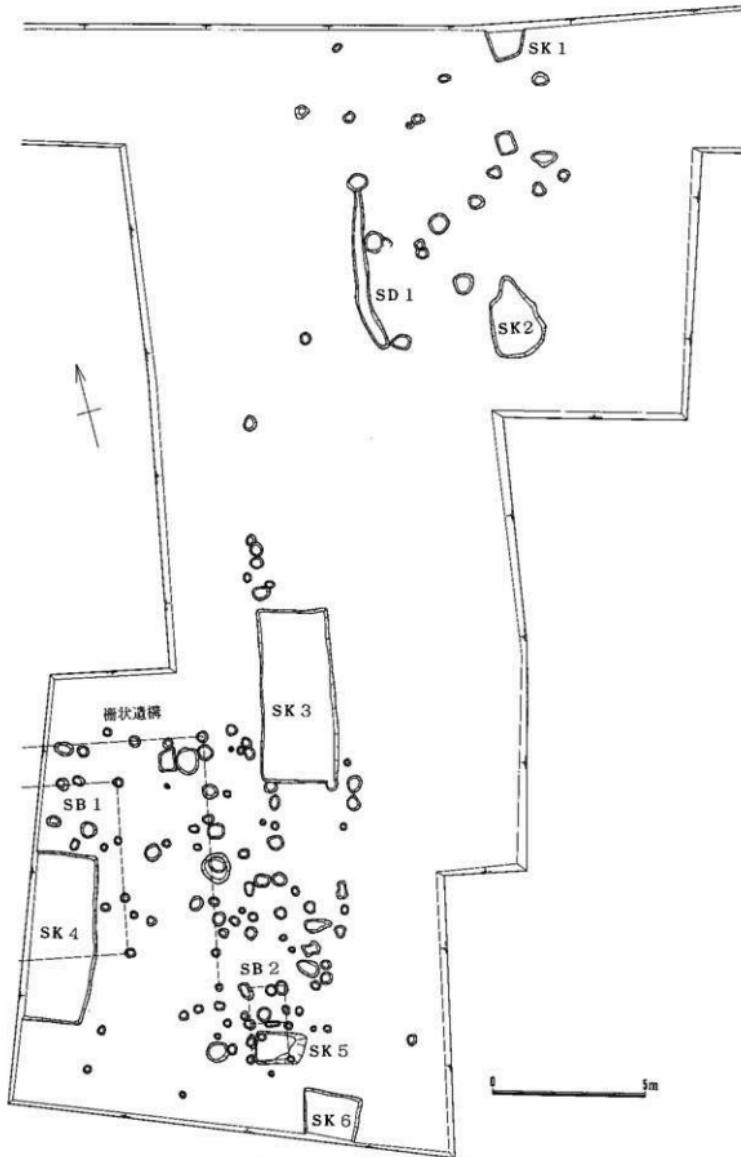
櫛 SB 1を囲うような形で検出された。柱間は不規則で、2.5～3.8mを測る。

溝 SD 1は削平を受けているため全容は不明であるが長さ残存部5.2m、幅32～42cm、深さ11～15cmを測る。

土坑 SK 1はトレンチ北端にあり、1.28×0.95m以上、深さ10～15cmを測る。遺物は含まれていない。SK 2は約2.65×約1.8mの不定形で深さ17～19cmを測る。遺物は出土しなかった。SK 3は6.2×2.47mの長方形で、深さ13～15cmを測る。鎌倉時代の土師器小皿の破片が少量出土している。SK 4は、SB 1を切っており、5.42×2.3m以上で、深さ6cm前後を測る。遺物は出土しなかった。SK 5は1×1.6mの腰丸長方形で深さ6cm前後を測る。遺物は含まれていなかった。SK 6はトレンチ南端に位置し、1.8×1.6m以上で、深さ12



第7図 北仰西海道・平ノ前・井ノ口遺跡トレンチ配置図



第8図 井ノ口遺跡・遺構実測図

cm前後を測る。鎌倉時代の土器小皿小破片・瓦質三足器の脚部・青磁碗片等が出土している。

#### (4) 遺 物

出土した遺物はきわめて少なく、図示できるものはなかったが、鎌倉時代のものと考えられる土器小皿等が出土している。

#### (5) 小 結

出土した遺物がきわめて少量であるため、遺構の明確な年代は得られなかった。しかし、SK3およびSK6より鎌倉時代のものと考えられる遺物が認められたことから、おおむねこの時代に当たると思われる。

## 6. 平ノ前遺跡の調査

#### (1) 調査の経過

今回の調査は遺跡の範囲確認に主眼を置いた。その為、調査対象地域に101ヶ所のトレンチを設け、遺構を確認した段階で掘り下げを中止し、遺構の掘り下げは行なわなかった。地区割りはトレンチ番号1～6をA地区、7～21をB地区、22～67をC地区、68～73をD地区、74～101をE地区とした。調査の結果はほぼ全域に、古墳時代～平安時代の遺構が検出された。

#### (2) 層 位

平均的に観察される層位は、第1層・耕作土、第2層・床土、第3層・黄褐色粘質土（平安時代）、第4層・暗褐色粘質土（古墳時代）、第5層・地山となっているが、各地区的北側には、第2層と第3層の間に灰色粘土層がみられた。これは、全体の地形が北に向って傾斜しているため、現水田の造成に伴なう整地層であると考えられる。

#### (3) 遺 構

検出された遺構は、円墳4基、古墳時代竪穴式住居7棟、平安時代掘立柱建物、溝、土坑などである。

**古墳** 古墳はすべて円墳であるが周濠の一部のみの検出であり、主体部は確認されなかった。1号墳は第23、26、27、29トレンチにまたがり、径約30m、周濠幅2.5～5mを測る。2号墳は一部が27トレンチで検出され、径約20m、周濠幅約4mを測る。3号墳は第30トレンチで一部が検出され、径約17m、周濠幅2.2～2.5mを測る。4号墳は第49トレンチで一部が検出されたもので、径約19m、周濠幅約3.5mを測る。

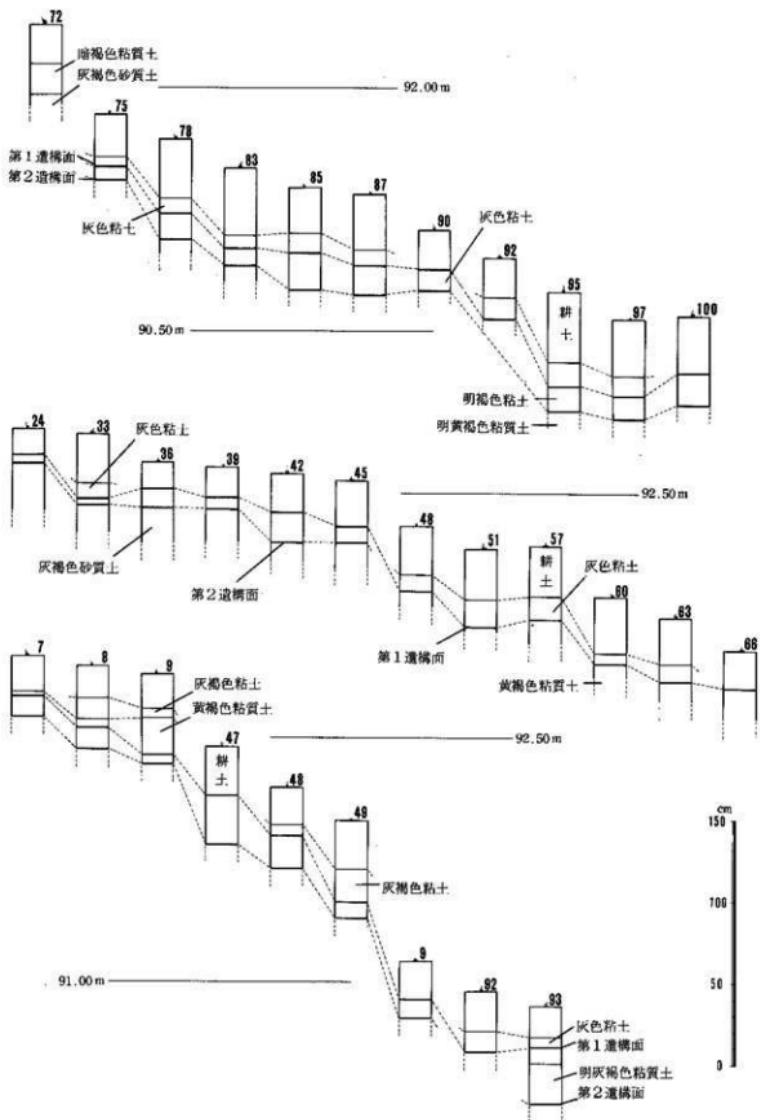
**竪穴式住居跡** すべて限丸方形の住居跡で、それもその一部分のみを検出したにとどまり、全容を知り得たものはない。1号住居跡は、第10トレンチからの検出である。2号住居跡は第13トレンチからの検出で、中央付近に径約50cm程の範囲に焼土がみられる。4号住居跡は第39トレンチからの検出である。5号住居跡は第42トレンチからの検出である。6号住居跡は第64トレンチからの検出であり、1辺の長さが4.1mを測る。7号住居跡は第97トレンチからの検出である。

**掘立柱建物** 柱穴と思われる遺構はほぼ全域から検出されたが、建物として確認されたものは第18トレンチから検出されたもので、2間×2間以上のもので、柱間は東西約7m、南北約5.1mを測る。

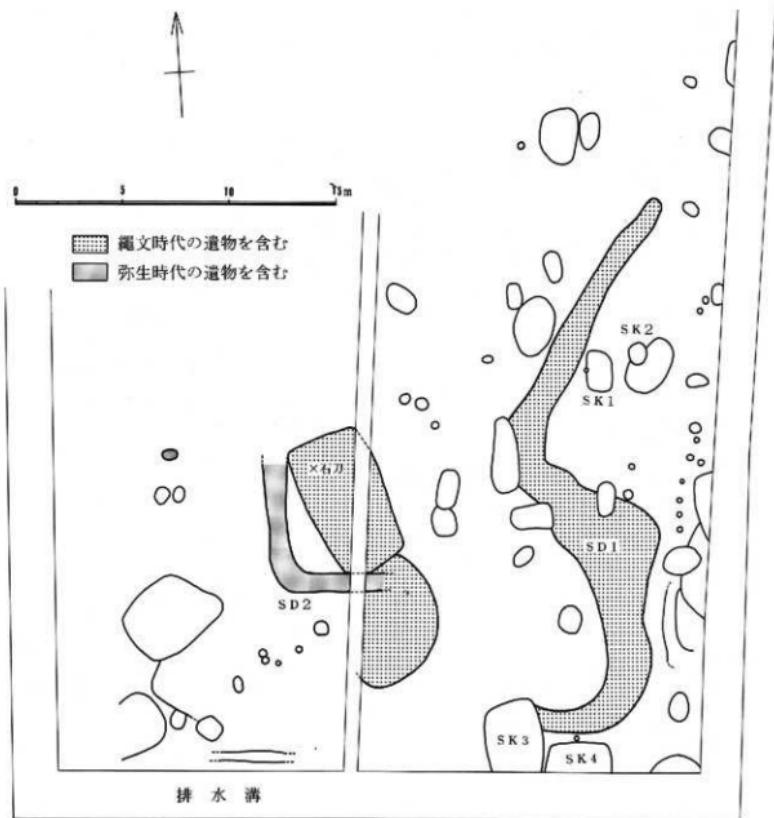
**溝状遺構** 溝状遺構は11条が検出された。うち第44トレンチおよび第51トレンチから検出された2条の溝は自然流路である。特に注目される溝としては、第56、57、58トレンチから検出された平行する南北に延びる2条の溝である。東側の溝は幅0.6～1.4mを測り、西側の溝は幅1.6m以上を測る。

**土坑** 土坑もほぼ全域から15基検出された。ほとんどが約0.5～2m程の梢円形を呈するものであるが、径が約4mを測る大形のもの、径1m未満の小形のものなどもみられる。

#### (4) 遺 物



第9図 平ノ前道路土層模式図



第10図 北仰西海道遺跡・遺構実測図

すべて包含層からの出土で、平安時代後期の土師器小皿、輸入陶磁器、布留併行期の土師器類が出土している。

#### (5) 小 結

今回の調査の結果、大規模な複合遺跡の存在が明らかになったが、部分的な調査であり、遺構の掘り下げを行なわなかったため、遺跡の性格を明らかにするまではいたらなかった。しかし、低地における古墳群の存在や、集落の存在が明らかになったことなど、当地方の歴史を解明する上で貴重な資料を提供することができた。

### 7. 北仰西海道遺跡の調査

#### (1) 調査の経過

調査対象地はすでに工事のため削平され、明確な遺構は存在せず、からうじてその痕跡を検出したにすぎず、

その年代および性格は必ずしも明らかにし得なかった。

### (2) 層位

平均的な層位は、第1層・耕作土、第2層・暗褐色粘質土、第3層・暗灰色粘質土、第4層・明黄褐色粘質土（縄文時代後期）である。第4層以外の年代は明らかにし得なかった。遺構面の絶対高は89m付近にある。

### (3) 遺構

検出された遺構は、2条の溝、土坑、ピットなどであり、その他に縄文時代後期の遺物が多量出土した2ヶ所の落込みをはじめ、8ヶ所の自然堆積と考えられる部分がみられる。

溝状遺構 SD1は南北にS字状にカーブする溝で幅1.2~4.0mを測る。深さは掘り下げを行なわなかったため不明である。検出時に縄文時代後期の土器が比較的多く出土している。SD2はほぼ直角に屈曲する溝で、幅0.9~1.2m、深さ20cm以上を測り、弥生時代終末期の土器が出土している。方形周溝墓の一部である可能性が強い。

土坑状遺構 土坑と考えられる部分が30ヶ所程検出された。SK1~4はいずれも埋土が黒褐色炭化物で、近世の陶磁器類が出土した。その他に関しては年代は不明である。

その他 柱穴と思われるピットが多数認められた。

### (4) 小結

調査時にはすでに遺構のはとんどが削平されてしまったため、遺跡の全体像は把握できなかった。しかし、低地における縄文時代後期の集落の存在を示す土器群の出土や、工事中の採集ではあるが、石田川右岸における弥生時代中期の土器の存在が明らかになったことなど注目すべき成果をあげることができた。

## 8. 北仰西海道遺跡の縄文時代遺物

今回の発掘調査により出土した遺物には、縄文式土器、弥生式土器、陶磁器、石製品等があり、その大部分が遺物包含層よりの出土である。ここでは縄文式土器を中心にその形態、施文方法等から三つの時期に別けて述べていくことにする。

### (1) 縄文式土器

#### 第1群

磨消縄文を含む、刻み目を施した土器の一群。

- (1) 大きな波状口縁になる磨消縄文の浅鉢で、幅の狭い2条一組の沈線と、その沈線間に縄文が残る。また波頂部の中央表裏に山型の凹文を入れる。器壁の内外面共に丁寧な研磨がなされている。
- (3) 1本の幅広の沈線と4条の細い沈線と箆状工具による刺突文が入る深鉢で、恐らく波状口縁になるものと思われる。内面はナデ調整されている。
- (4) 波状口縁の波底部を中心として左右に広がる線の細い沈線と、箆状工具による刻み目を施す深鉢で、内面には丁寧な研磨がなされている。
- (5) 口縁部が内面肥厚した波状口縁の深鉢で、低い凸帯に刻み目が施されている。外面は貝殻条痕後研磨、内面にはナデ調整がなされている。

#### 第2群

I. 数条の沈線と箆状工具による刻み目を施した土器の一群。

- (2) 幅の狭い4条の沈線と箆状工具による刻み目が施されている深鉢で、内外面共に丁寧な研磨がなされている。

II. 沈線により区画された中に巻貝を回転させて縫繩文を施した深鉢の胴部で、内外面共に丁寧な研磨がなされている。

(7~11) 口縁部内面に1条の沈線を施し、沈線と口縁端部との間に連続する刻み目を施したもので、その形態により深鉢(7、8、10)と浅鉢に別けることができる。調整方法は貝殻による条痕を施した後に、ナデにより平滑に仕上げている。

(15) 短く内傾する口縁部外面に3条の沈線と貝殻压痕文、そしてその压痕文を取り囲むように棒状工具による刺突文を施す浅鉢で、内外面共に丁寧な研磨がなされている。

(22) 内傾する口縁部外面にやや広めの5条の沈線と、上下逆方向の貝殻压痕文を施す深鉢であり、口縁部下方の屈曲部に刻み目を施す。

(31) 頂部に2条の細い沈線と沈線内及び上方の沈線上面に刺突列点文、沈線間に箇状工具による刻み目を施す注口土器で、沈線内と沈線上方との刺突文では施文工具に違いがあり、棒状工具による太い刺突と、先の尖ったものによる細い刺突との2種類の工具により施文する。内外面共に丁寧な研磨がなされている。

(34) やや内寄する口縁部に3条の沈線と箇状工具による刻み目を施す深鉢である。

(39) 円筒状の握手手、口縁部に2条の沈線と、沈線間及び脚部との接合部分に箇状工具による刻み目を施し、握手手に1孔を穿ち、その穴を取り囲むように沈線が施されている。全体的に丁寧な研磨がなされている。

### 第3群

#### 幅広の沈線と巻貝による扇状圧痕文を施した土器の一群

(12、13、18、20、21、25) 幅広の沈線と巻貝による扇状圧痕文と施文は同一であるが、その形態により、口縁部が大きく外反する小型の鉢(12)、やや内傾ぎみに外反する恐らく注口土器になるかもしれない(13)、口縁部が内傾した大きな深鉢(20)、波状口縁になる深鉢(21)があり、(21)は他の扇状圧痕文と違い、輪状の貼付文をつけて直接貝殻压痕文を施文している。また上方を二枚貝、下方を巻貝というように貝殻の種類を変えているようである。(25)は恐らく貝殻压痕文がつくものと思われる。

(14、16、17、19、23) 幅広の沈線のみの施文であり、(16)を除いては口縁部が内傾する深鉢であり、(23)は波状口縁になるものと思われる。(16)は浅鉢かあるいは注口土器になるものかもしれない。(19)は沈線に棒状工具による刺突文が施されている。外面は貝殻条痕を残し、内面はナデにより平滑に仕上げられている。

(32、33) 幅広の沈線と棒状工具による刺突文を施した注口土器で、内面には粗い条痕を残す。

(35~38、42~44) 注口土器の注口部で、幅広の沈線で施文するもの(36、37)、幅の狭い沈線の両端に刺突を施すもの(38)、幅の狭い沈線と細線による羽状文を施すもの(44)、無文のもの(35、42、43)があり、有文土器は比較的丁寧な研磨がなされている。

粗製土器には浅鉢(24)、深鉢(30、40、41)等があり、その全てを図示しなかった。(41)は波状口縁であるが、浅鉢の波状口縁の土器は今回の調査においては出土しなかった。外面には貝殻条痕を残し、内面は丁寧なナデによって消されている。

底部(26~29)は4点しか図示しなかったが、出土土器の底部の全てが上げ底であり、比較的丁寧な研磨がなされているが、(27)の内面には貝殻条痕が残る。

今回の調査により出土した土器は、その大部分が遺物包含層よりの出土であり、遺構からの出土は微量であり、遺構の重複等から土器の前後関係を決定することは困難な状態である。だが他の遺跡の出土遺物との比較により、当遺跡出土土器を大きく別けて三つの土器形式に別けたのである。まず今回出土した土器の中で最も古い形式と考えられるものが、第1群とした北白川上層式である。唯一(1)のみが磨消繩文の手法を残すもので

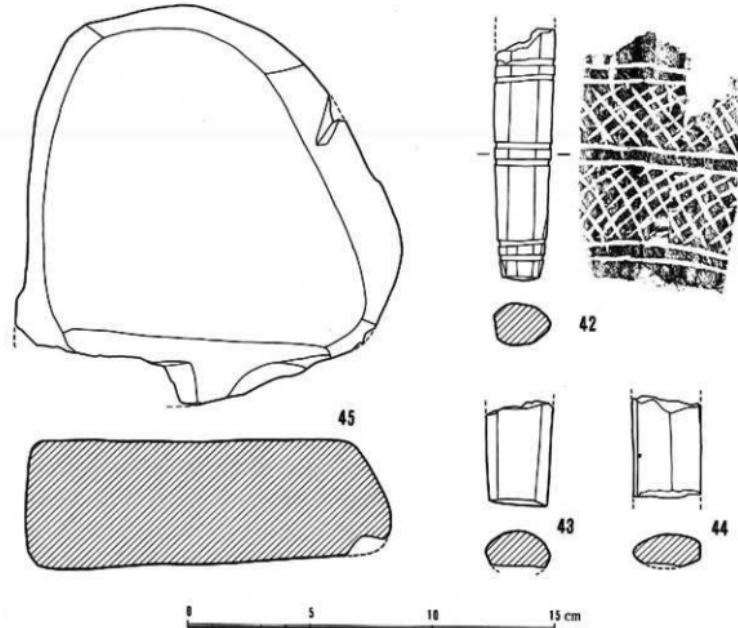
あり、他の第1群の土器と同一形式として扱うにはやや矛盾するかもしれないが、他の第1群土器を第2群土器と一緒に扱うにも、やや古い様相を示していると考えられたので、ここでは一応第1群土器として扱っておく。次の第2群土器は沈線と刻み目、刺突という元住吉山Ⅱ式の特徴を兼ねそなえている。ただ振繩文を施す土器(6)も1点ではあるがまじっており、或いは元住吉山Ⅰ式にまでさかのぼる土器がふくまれているのかもしれない。第3群とした土器は幅広の浅い沈線と、巻貝による扇状圧痕文を施しており宮滝式のものと考えられる。

粗製土器及び底部は、精製土器と同様同一包含層よりの出土であり、いざれの土器形式に属するのかは不明であるが、網代痕を残す平底の底部が1点も出土していないこと、粗製土器の器壁外面に貝殻条痕を残すこと等により、元住吉山式か或いは宮滝式に属するものと思われる。

湖西地域の縄文時代後期の土器分布をみてみると、マキノ町仏性寺遺跡では後期前葉の中津式から後期中頃の北白川上層式までの遺物が出土しており、後期前葉においては瀬戸内海地方の影響を強く受けたことと考えられる。マキノ町上開田遺跡においては、後期中頃（北白川上層式～一乗寺K）の遺物が出土しており、今回の調査によって出土した遺物が、これらの遺物につづく時期のものであり、一応湖西地域においては、縄文時代後期前葉より後半までそろったことになるのである。

## (2) 石 器

(42) 二条一对になる断面「U」字型の沈線と同じく断面「U」字型になる斜格子の沈線により施文された石



第11図 北仰西海道遺跡・石器実測図

剣か石刀の柄部と思われるもので、柄頭には粗い研磨が施され、他は丁寧な研磨が施されている。材質は頁岩を使用している。同じようなものが、湖西線関係遺跡より出土している。<sup>④</sup>

(43、44) 石刀と思われるものの破片であり、一側縁を刃部として研磨しているようであるが、刃は純く実用の利器とは考えられない。(43)の一端面には丁寧な研磨が施され、アジノール板岩を使用している。(44)は頁岩を使用している。

(45) 石皿と思われるもので、一面のみ使用により滑らかになっている。砂岩を使用している。

これらの石器も土器と同様、包含層からの出土であり、時期を決定する資料にとばしいのであるが、恐らく土器同様に縄文時代後期後半頃のものと思われる。

#### 註

- ① 管原正明「畿内における土釜の製作と流通」(『文化財論叢 奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集』 昭和58年)
- ② 兼康保明・本田修平・堀内宏司「高島郡マキノ町仏性寺遺跡」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』 M-2 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 未刊)
- ③ 兼康保明・本田修平・堀内宏司「高島郡マキノ町上開田遺跡」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』 M-1 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 昭和55年)
- ④ 加藤修・丹羽佑一・吉川義彦・高谷美由紀「縄文時代」(『湖西線関係遺跡報告書』 滋賀県教育委員会 昭和60年)

第1表 構遺跡出土土器観察表

| 器形   | 番号 | 法量(cm)<br>径<br>器高          | 残部           | 形態の特徴   | 手法の特徴                               | 備考  |
|------|----|----------------------------|--------------|---|-------------------------------------|---|
| 皿    | 1  | 8.4                        | 1.2          | 1/5<br>口縁部は内窪ぎみに立ち上がり、端部は丸くおさまるもの(4)、口縁部は外反し端部は丸くおさまるもの(2・3・5)、口縁部は立ち上がり、端部は丸くおさまるもの(1・6・7・8)がある。底部は丸味をもち、口縁部と底部との境に棱をもつ。(1)は底部平坦ぎみである。 | 口縁部は横なで。底部内面仕上げなで、外面不調整。            | 色調 (1・2・3・5・6・7)<br>淡黄褐色<br>(4)淡灰白色<br>(8)淡赤褐色<br>胎土 精良<br>焼成 良好      |
|      | 2  | 8.4                        | 1.5          | 1/4   |                                     |   |
|      | 3  | 8.0                        | 1.6          | 1/5   |                                     |   |
|      | 4  | 8.8                        | 1.7          | 1/4   |                                     |   |
|      | 5  | 8.4                        | 2.0          | 1/2   |                                     |   |
|      | 6  | 8.2                        | 1.9          | 1/2   |                                     |   |
|      | 7  | 8.2                        | 1.9          | ほぼ完形  |                                     |   |
|      | 8  | 9.6                        | 1.5          | 1/4   |                                     |   |
| 天目茶碗 | 9  | 口径 12.7                    |              | 口縁部は内窪ぎみに外上方に立ち上がり、端部は外反させながら尖りぎみにおわる。  | 内外面横なで。外面下位へラ削り。                    | 色調 淡灰白色<br>胎土 精良<br>焼成 硬<br>残部 1/4                                    |
|      | 10 | 口径 9.8<br>器高 3.7<br>底径 4.6 |              | 口縁部は内窪ぎみに外上方に立ち上がり、端部は外反し尖り氣味におわる。平底の底部をもつ。   | 内外面横なで。底部回転系切り後、ヘラ削り。ロクロ回転不明。       | 色調 淡灰白色<br>胎土 精良<br>焼成 硬<br>残部 1/3                                    |
|      | 11 |                            |              | 口縁部は内窪気味に立ち上がり、端部は丸くおさまる。   | 内外面横なで。                             | 色調 淡黄褐色<br>胎土 細砂を含む<br>焼成 良好<br>残部 小片                                 |
|      | 12 |                            |              | 外面に断面三角形状の鋸をもち、口縁部は上方にのび、端部は方形状におわる。  | 外面横なで。内面刷毛目。                        | 色調 淡黄褐色<br>胎土 細砂を含む<br>焼成 良好<br>残部 小片                                 |
| 羽釜   | 13 | 口径 22.6                    |              | 口縁部はくの字状に外反し端部は内側に折り曲げ嘴状におわる。つば部は水半状にのび端部は丸くおわる。  | つば部を貼付後、内外面横なで。外面下位なで仕上げと思われる。      | 色調 淡黄褐色<br>胎土 細砂を含む<br>焼成 良好<br>残部 1/5                                |
|      | 14 | 口径 14<br>14<br>15          | 23.6<br>24.0 | 外面に水平方向に短くのびる鋸をもつものあり、口縁部は内側にのびる。口縁端部が丸くおわるもの(14)や方形状のもの(15)がある。体部は丸味をもつ。   | 外面なで仕上げ。(14)は鋸下に刷毛目痕もつ。内面は刷毛目。      | 色調 (14)淡黄褐色<br>(15)淡茶灰色<br>胎土 細砂を含む<br>焼成 良好<br>残部 (14)1/4<br>(15)1/7 |
|      | 16 | 口径 15.3                    |              | くの字状に外反する頭部に屈曲部をもち、端部はそのまま上方にのび丸くおわる。   | 内外面横なで。口縁部外面凹線文。                    | 色調 淡黄褐色<br>胎土 細砂を含む<br>焼成 良好<br>残部 1/10                               |
|      | 17 | 口径 16.6                    |              | くの字状に外反する頭部に屈曲部をもち、端部はそのまま上方にのび丸くおわる。   | 口縁部内外面横なで。体部外面に刷毛目、内面ヘラ削り口縁部外面に髪凹線。 | 色調 淡黄褐色<br>胎土 細砂を含む<br>焼成 良好<br>残部 1/10                               |
| 高杯   | 18 |                            |              | 内窪ぎみの脚柱部に外反ぎみの脚握部をもつ。   | 内外面なで仕上げ。脚内面上位にしばり目底もつ。             | 色調 淡黄褐色<br>胎土 砂粒を含む<br>焼成 良好<br>残部 1/2                                |

| 器形 | 番号   | 法量(cm)    | 形態の特徴  | 手法の特徴   | 備考  |
|----|------|-----------|--|---|---|
| 甕  | 19   | 口径 14.4   | くの字状にゆるやかに外反する瓶部に眉部をもち、端部を上・下方に突出させ丸くおわる。                        | 内外面横なで。口縁部外面に擬凹線。                                 | 色調 淡黄橙色<br>胎土 砂粒を含む<br>焼成 良好<br>残部 1/10               |
|    | 20   | 底径 5.6    | 平底の底部で外上方にのびる体部をもつ。  | 体部外面へラ磨き、内面刷毛目底もつ。底部裏面なで。                         | 色調 淡乳白色<br>胎土 細砂を含む<br>焼成 良好<br>残部 ほぼ完存               |
| 高盤 | 21   | 口径 21.4   | 受部は外方にのび、口縁部は外反し、端部は内側に折り返し丸くおわる。                                | 受部内外面横なで。内面に正放射状暗い。                               | 色調 淡赤橙色<br>胎土 精良<br>焼成 良好<br>残部 1/10                  |
| 皿  | 22   | 口径        | 内寄気味に外上方にのびる口縁部であり、端部は内側に丸くつまみ上げる。                               | 口縁部内外面横なで。底部内面なで、外而不調整。                           | 色調 淡赤橙色<br>胎土 精良<br>焼成 良好<br>残部 (22) 1/8<br>(23) 1/10 |
|    | 23   | (22) 19.8 |  |   |   |
|    | 24   | (23) 19.0 |  |   |   |
| 杯  | 25   | 口径 15.6   | 内寄気味に外上方にのびる口縁部であり、端部は内側に肥厚する。                                   | 内外面横なで。   | 色調 淡赤橙色<br>胎土 精良<br>焼成 良好<br>残部 1/9                   |
|    | 26   | (25) 15.0 |  |   |   |
|    | 27   | (26) 13.9 |  |   |   |
| 皿  | 27   | 口径 13.9   | 外上方にのびる口縁部であり、端部は尖り気味におわる。                                       | 内外面横なで。   | 色調 淡赤橙色<br>胎土 精良<br>焼成 良好<br>残部 1/7                   |
| 椀  | 28   | 口径 14.3   | 内寄気味に上方にのびる口縁部であり、端部に内側に回り込み丸くおわる。                               | 内外面横なで。中位に内外面指圧痕を残す。                              | 色調 淡黄橙色<br>胎土 精良<br>焼成 良好<br>残部 1/6                   |
| 蓋  | 29   | 口径 15.7   | 天井部は水平であり、口縁端部を下方につまみ出し丸くおわる。                                    | 内外面横なで。   | 色調 淡赤橙色<br>胎土 精良<br>焼成 良好<br>残部 1/8                   |
| 蓋  | 30   | 口径 25.8   | 水平な天井部をもち、口縁端部を下方につまみ出し方形状におわる。                                  | 内外面横なで。天井部外面へラ削り。ロクロ時計回り。                         | 色調 淡灰白色<br>胎土 細砂を含む。<br>焼成 硬<br>残部 1/9                |
|    | 31   | 口径        | 水平な天井部をもち、口縁端部は下方につまみ出し丸くおわる。つまみは扁平で中央が隆起するものの(31)や山形のもの(33)がある。 | 天井部外面へラ削り。内面仕上げなで。口縁部内外面横なで。ロクロ時計回り。(33)は天井部に墨書き。 | 色調 (31-32) 淡青灰色<br>(33) 淡灰白色                          |
|    | 32   | (32) 18.4 |  |   | 胎土 砂粒を含む  |
|    | 33   | (33) 13.8 |  |   | 焼成 硬<br>残部 (31-32) 1/5<br>(33) 1/4                    |
|    | 器高   |           |  |   |   |
|    | (33) | 2.6       |  |   |   |

| 器形 | 番号            | 法量(cm)  | 形態の特徴  | 手法の特徴  | 備考  |
|----|---------------|---|--|--|---|
|    | 34<br>1<br>36 | 口径<br>(34) 13.8<br>(35) 13.0<br>(36) 12.9<br>器高<br>(34) 1.7<br>(35) 2.9   | 丸味をもつ天井部で、口縁部は下方に尖り氣味におわる。<br>つまみは扁平で中央が隆起するもの(35)や山形をなすもの(34)がある。 | 内外面横なで。天井部内面仕上げなで、クロ時計回り。                      | 色調 淡灰白色<br>胎土 細砂を含む<br>焼成 硬<br>残部 (34)完形<br>(35) 1 / 4<br>(36) 1 / 4                  |
| 皿  | 37<br>38      | 口径<br>(37) 14.4<br>(38) 13.5<br>器高<br>(37) 1.7<br>(38) 2.4  | 口縁部は外上方にのび、端部をつまみ出し尖り氣味におわる。                                       | 口縁部横なで。底部内面仕上げなで、外面ヘラ切り(37)<br>ヘラ削(38)。クロ時計回り。 | 色調 淡灰白色<br>胎土 (37)精良<br>(38)細砂を含む<br>焼成 硬<br>残部 (37) 1 / 4<br>(38) 1 / 8              |
| 杯  | 39<br>40      | 口径 13.4<br>器高 3.4<br>底径 10.5  | 口縁部は内窯氣味に外上方にのび、端部は丸くおわる。  | 口縁部横なで。底部内面仕上げなで、外面ヘラ切り。<br>ロクロ回転は不明。          | 色調 淡黄白色<br>胎土 砂粒を含む<br>焼成 軟<br>残部 1 / 5   |
|    | 41            | 口径 12.6<br>器高 3.0<br>底径 7.2   | 口縁部は外上方にまっすぐ<br>にのび、端部は尖り氣味におわる。                                   | 口縁部横なで。底部内面仕上げなで。外面ヘラ切り。<br>ロクロ時計回り。           | 色調 淡青灰色<br>胎土 細砂を含む<br>焼成 硬<br>残部 1 / 6   |
|    | 42            | 口径 17.5<br>器高 4.7<br>底径 13.3  | 口縁部は内窯氣味に外上方にのび、端部は外方につまみ出し方形状におわる。                                | 口縁部横なで。底部内面横なで、外面ヘラ削り。ロクロ時計回り。                 | 色調 淡灰白色<br>胎土 細砂を含む<br>焼成 硬<br>残部 1 / 4   |
|    | 43<br>47      | 口径<br>(43) 13.0<br>(44) 13.0<br>(45) 11.9<br>(46) 13.6<br>(47) 13.4<br>器高<br>(43) 4.6<br>(44) 4.9<br>(45) 3.9<br>(46) 3.6<br>(47) 4.8<br>底径<br>(43) 8.1<br>(44) 8.0<br>(45) 7.9<br>(46) 9.0<br>(47) 8.2 | 底部より外上方にのびる口縁部をもち、端部は丸くおわる。高台は方形状のもの(45・47)と逆台形状のもの(43・46)がある。     | 口縁部横なで。底部内面仕上げなで、外面ヘラ切り。貼付け高台。クロ時計回り。          | 色調 淡灰白色<br>胎土 (43)細砂を含む<br>(44-47)<br>砂粒を含む<br>焼成 硬<br>残部 (43) 1 / 6<br>(44-47) 1 / 4 |
|    | 48            | 口径 12.4<br>器高 4.8<br>底径 6.6   | 内窯氣味に外上方にのびる<br>口縁部で、端部は丸くおわる。<br>高台は方形状におわる。                      | 口縁部横なで。底部内面仕上げなで、外面ヘラ切り。ロクロ時計回り。               | 色調 青灰色<br>胎土 細砂を含む<br>焼成 硬<br>残部 1 / 3  |

| 器 形            | 番号 | 法 量(cm)                      | 形 態 の 特 徵   | 手 法 の 特 徴   | 備 考   |
|----------------|----|------------------------------|---|---|---|
| 杯              | 49 | 口径<br>(49) 13.4<br>(50) 13.7 | 底部より外上方にのびる口<br>縁部で、端部を内窓気味に外<br>上方につまみ上げ丸くおわる。<br>高台は逆台形状のもの(50)と<br>方形状(49)がある。 | 口縁部横なで。底部内面横<br>なで、外面へラ切り。貼り付<br>け高台。ロクロ時計回り。                   | 色調 淡灰白色<br>胎土 (49)細砂を含む<br>(50)砂粒を含む<br>焼成 硬<br>残部 (49) 1 / 8<br>(50) 1 / 5 |
|                | 50 | 器高<br>(49) 4.4<br>(50) 4.7   |   |   |   |
|                | 51 | 底径<br>(49) 7.9<br>(50) 8.5   |   |   |   |
|                | 52 | 口径 13.0<br>器高 3.9<br>底径 7.8  | 底部より内窓気味に外上方<br>にのびる口縁部で、端部を外<br>反し丸くおわる。高台は逆台<br>形状である。                          | 口縁部横なで。底部内面横<br>なで、外面へラ切り。ロクロ<br>時計回り。裏面に墨書き。                   | 色調 淡灰白色<br>胎土 細砂を含む<br>焼成 硬<br>残部 1 / 3                                     |
|                | 53 | 口径 14.6<br>器高 5.0<br>底径 9.3  | 底部より外反気味に外上方<br>にのびる口縁部で、端部は尖<br>り気味におわる。高台は逆台<br>形状である。                          | 口縁部横なで。底部内面仕<br>上げなで、外面へラ切り。貼<br>り付け高台。ロクロ時計回り。<br>裏面に重ね焼き痕もつ。  | 色調 淡灰白色<br>胎土 細砂を含む<br>焼成 硬<br>残部 1 / 3                                     |
|                | 54 | 口径 4.4<br>器高 8.9<br>底径 4.0   | 口縁部は外反し、端部は丸<br>くおわる。体部は肩部が張り<br>丸味をもつ。高台は台形状を<br>なす。                             | 内外面横なで。底部外面高<br>台貼り付けナデ。内面にヘラ<br>具によるあたり痕がある。ロ<br>クロ逆時計回り。      | 色調 淡灰白色<br>胎土 細砂を含む<br>焼成 硬<br>残部 完形  |
| 小 形 壺          | 55 | 口径 12.0                      | 内窓気味に外上方にのびる<br>口縁部で、端部を外反し丸く<br>おわる。   | 口縁部横なで。内外面縁釉。<br>ロクロの回転不明。                                      | 色調 淡緑色<br>胎土 精良<br>焼成 硬<br>残部 小片  |
| 綠 糊 梗<br>(須恵質) | 56 | 口径 17.8                      | 外上方にのびる口縁部で、<br>端部を外反し丸くおわる。  | 口縁部へラ磨き?<br>内外面縁釉。  | 色調 淡緑色<br>胎土 精良<br>焼成 良好<br>残部 1 / 10                                       |
| 綠 糊 梗<br>(須恵質) | 57 | 底径 6.4                       | 平底の底部。  | 内外面横なで。底部削り出<br>し高台。ロクロ時計回り。                                    | 色調 淡緑色<br>胎土 精良<br>焼成 硬<br>残部 3 / 4   |
| 無釉陶器<br>椀      | 58 | 口径 16.0                      | 内窓気味に外上方にのびる<br>口縁部で、端部を外反し丸く<br>おわる。   | 口縁部横なで。外面下半へ<br>ラ削り。ロクロ回転不明。                                    | 色調 淡灰白色<br>胎土 精良<br>焼成 硬<br>残部 1 / 7  |
|                | 59 | 口径 16.6<br>器高 5.8<br>底径 7.8  | 底部より内窓して外上方に<br>のびる口縁部で、端部を外反<br>し丸くおわる。底部は中央が<br>凹む。                             | 口縁部横なで。外面ていね<br>いなへラ削り。底部削り出し<br>高台。ロクロ時計回り。内面<br>自然釉、重ね焼き痕をもつ。 | 色調 淡青灰色<br>胎土 精良<br>焼成 硬<br>残部 1 / 4  |
| 甕              | 60 | 口径 24.0                      | 外反する口縁部で端部を上<br>方につまみ上げ丸くおわる。   | 内外面横なで。ロクロ回転<br>不明。   | 色調 青灰色<br>胎土 砂粒を含む<br>焼成 硬<br>残部 1 / 8                                      |

| 器 形 | 番 号 | 法 量(cm) | 形 態 の 特 徴                    | 手 法 の 特 徴                                   | 備 考                                     |
|-----|-----|---------|------------------------------|---|---|
| 甕   | 61  | 口径 45.6 | 外反する口縁部で、端部を上・下方につまみ出し丸くおわる。 | 内外面横なで。ロクロ逆時計回り。内面に自然輪付着。                   | 色調 淡灰白色<br>胎土 砂粒を含む<br>焼成 硬<br>残部 1/12  |
| 壺   | 62  | 底径 14.5 | 平底の底部で、体部は外上方にのびる。           | 内面横なで、底部は平滑であり、指圧痕もつ。外面体部ヘラ削り、底部なで。ロクロ時計回り。 | 色調 淡灰白色<br>胎土 細砂を含む<br>焼成 硬<br>残部 1/4   |
| 鉢   | 63  | 口径 22.4 | 外上方にのびる口縁部で、縁部は方形状におわる。      | 内外面横なで。外面下半ヘラ削り。ロクロ時計回り。                    | 色調 淡灰白色<br>胎土 細砂を含む。<br>焼成 硬<br>残部 1/10 |



1 C地区全景（東より）



2 今津北小学校北側（東北より）



1 第7トレンチ（東北より）



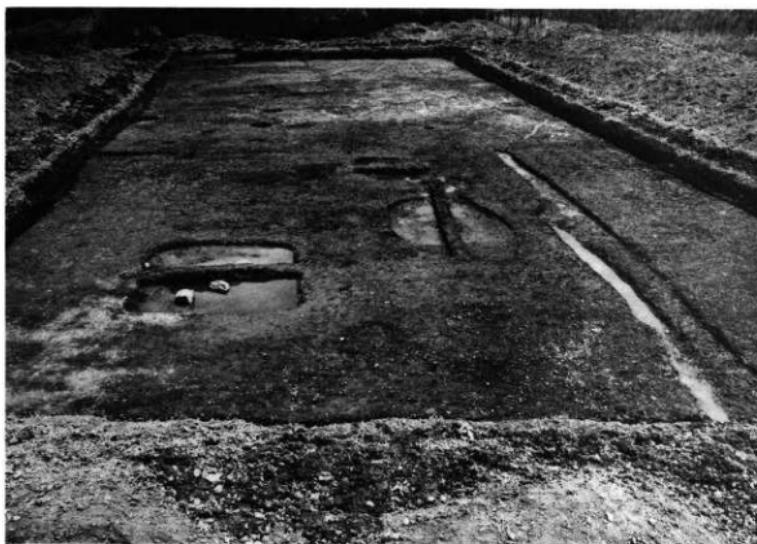
2 第7トレンチ（南より）



1 第5トレンチ（東より）



2 第11トレンチ（東より）



1 第41トレンチ（西より）



2 第41トレンチ（西より）



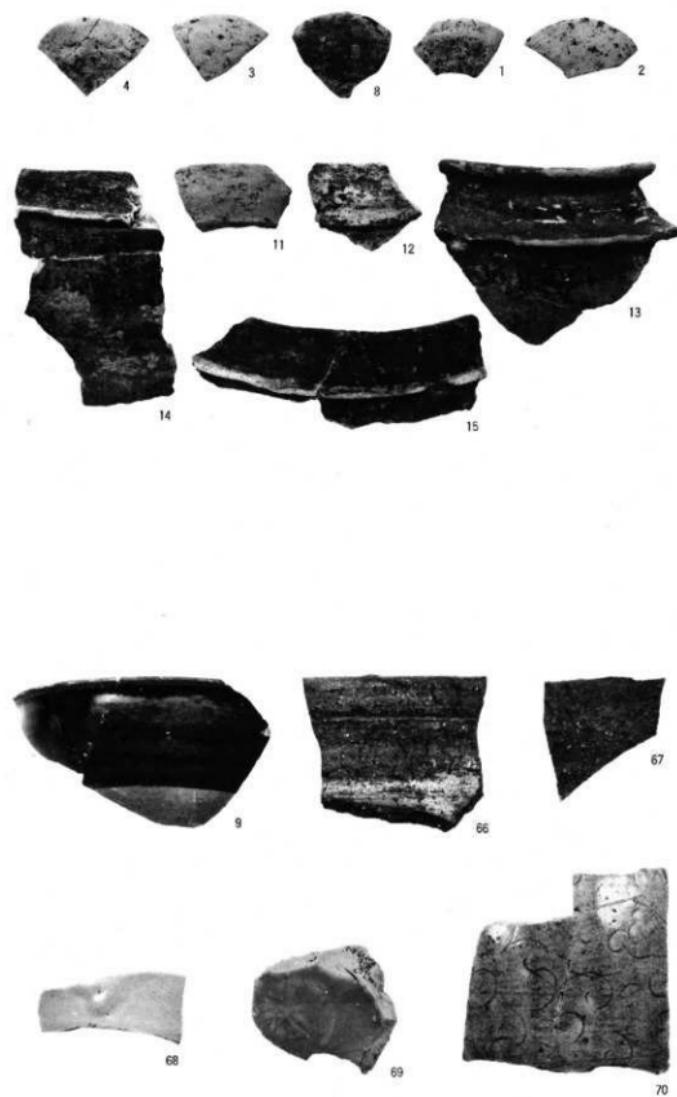
1 第47トレンチ（東より）

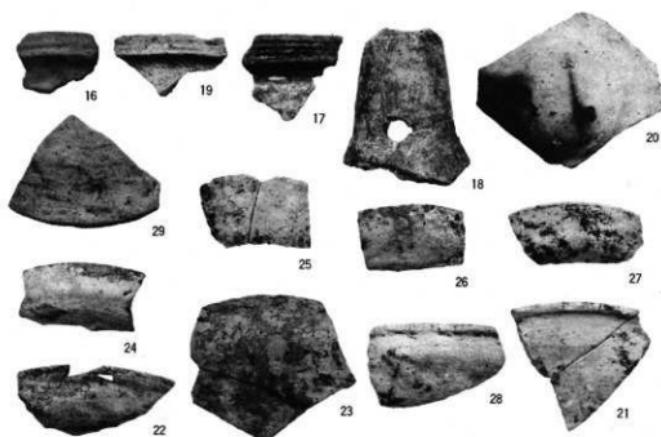


2 第49トレンチ（東より）

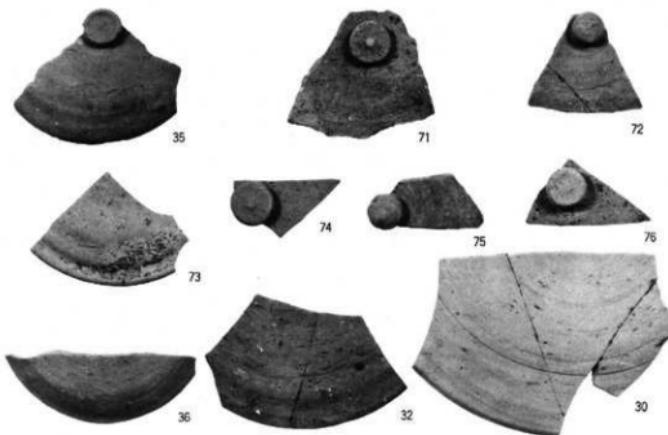
図版六 今津町構遺跡・遺物(1)





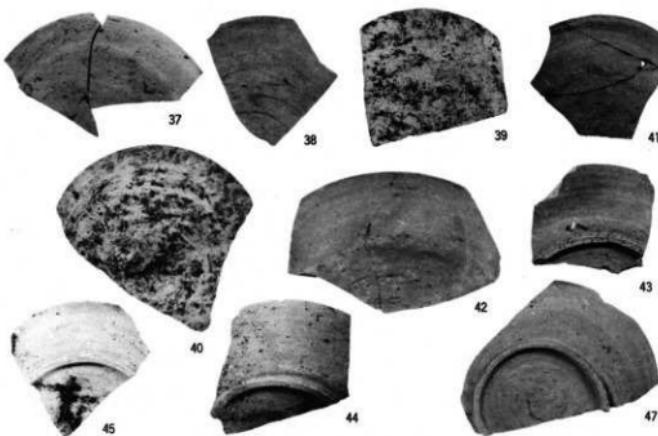


1 弥生式土器、土師器

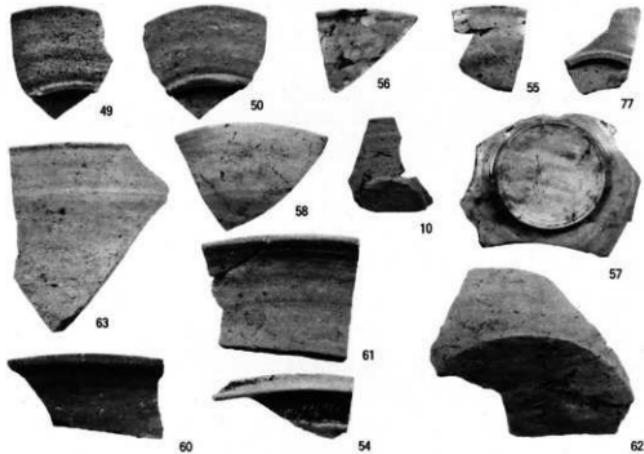


2 須恵器杯蓋

図版九 今津町構遺跡・遺物(4)



1 須恵器杯身



2 須恵器、無釉陶器、緑釉陶器



1 平ノ前遺跡、北仰西海道遺跡（西南より）

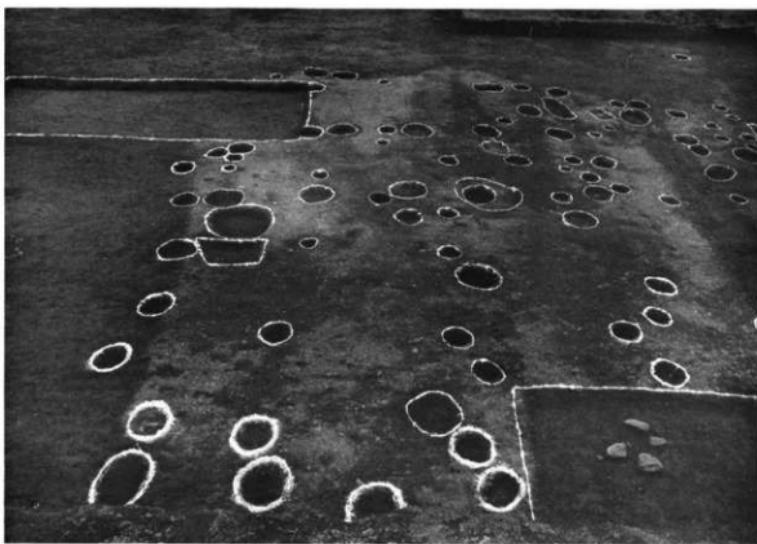


2 井ノ口遺跡（東南より）

図版  
一一 今津町井ノ口遺跡・遺構



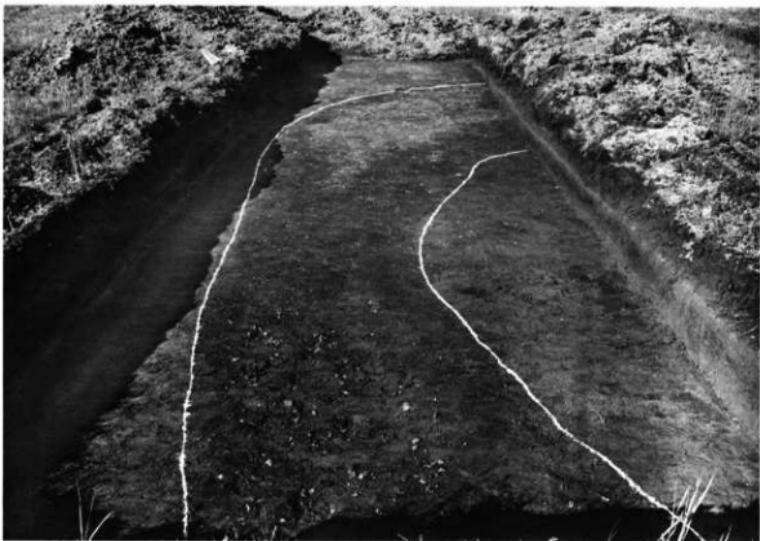
1 井ノ口遺跡、遺構（北より）



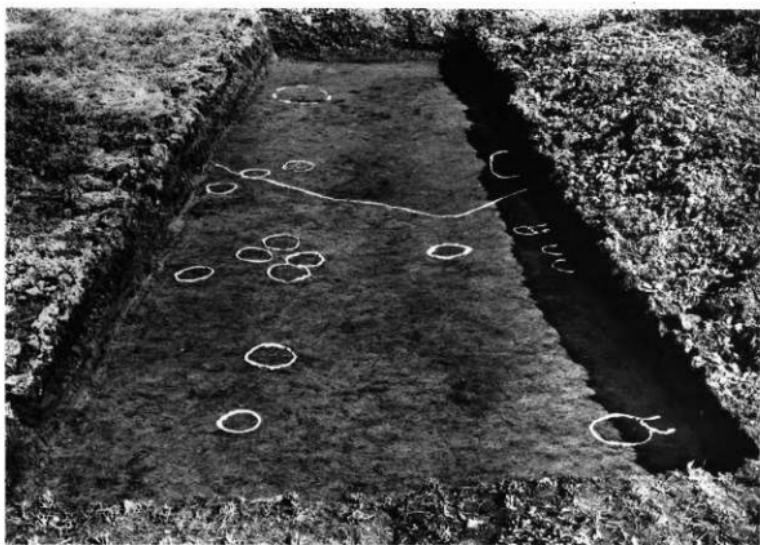
2 井ノ口遺跡、遺構（西より）



1 1号墳(南より)



2 3号墳(南より)



1 第13トレンチ (南より)



2 第42トレンチ (南より)

図版一四 今津町北仰西海道遺跡・遺構

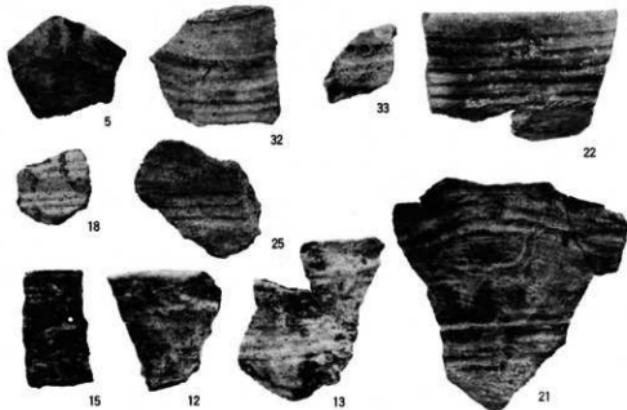
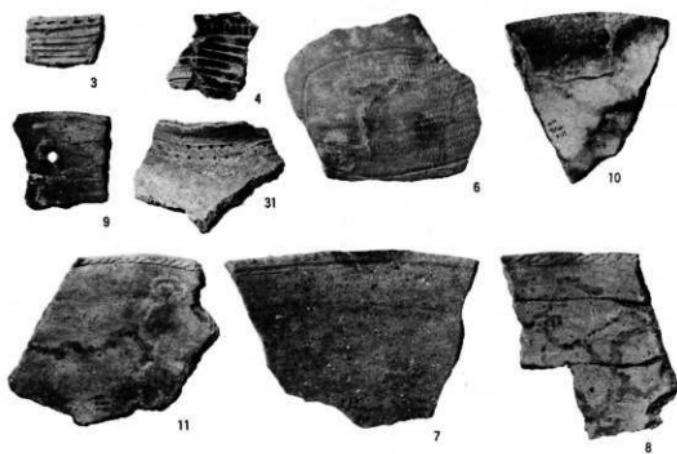


1 第102トレンチ（南より）

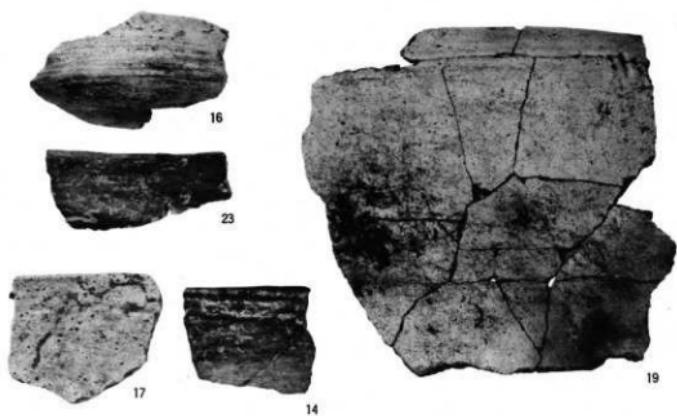


2 第102トレンチ（東より）

図版一五 今津町北仰西海道遺跡・遺物（縄文式土器）(1)



図版一六 今津町北仰西海道遺跡・遺物（縄文式土器）(2)



図版一七 今津町北仰西海道遺跡・遺物（縄文式土器）(3)



26



27



28



29



36



42

43

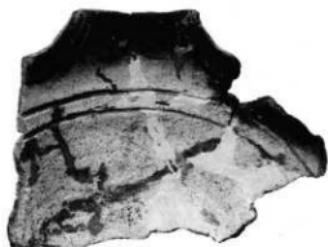


45

44

37

1



20



39

弥生式土器



45



42

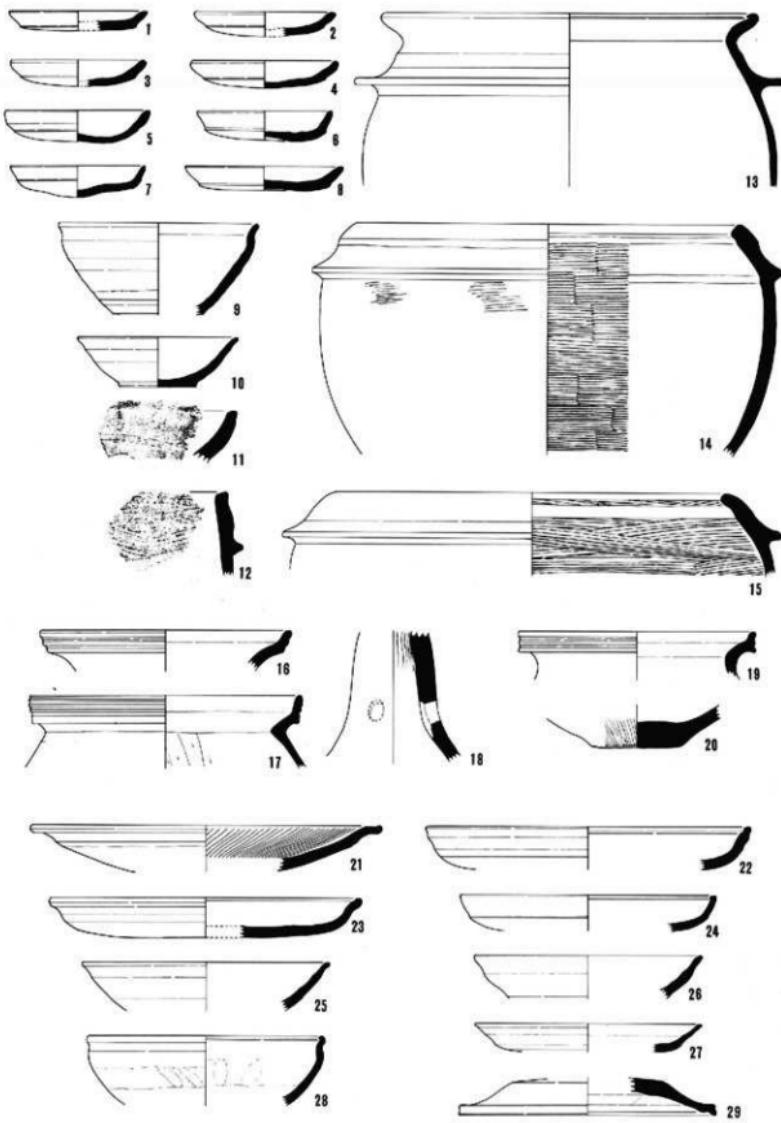


43



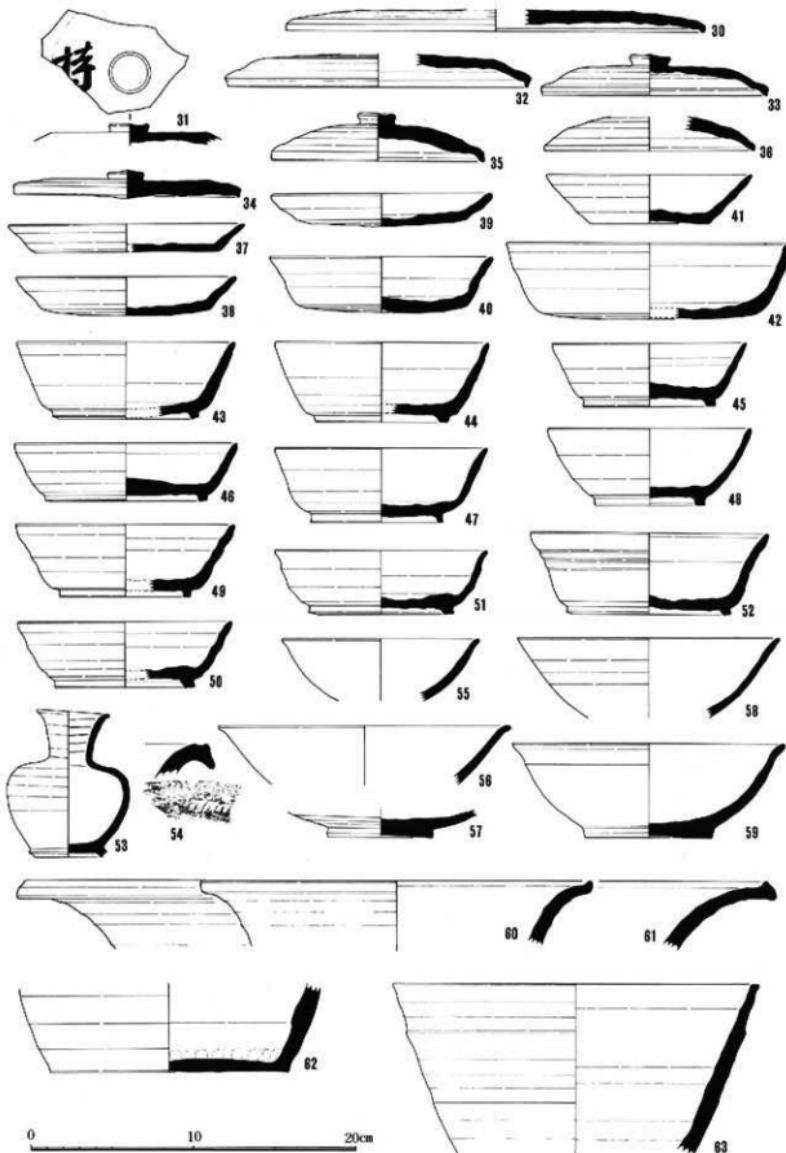
44

図版一九 今津町構遺跡・土器実測図(1)

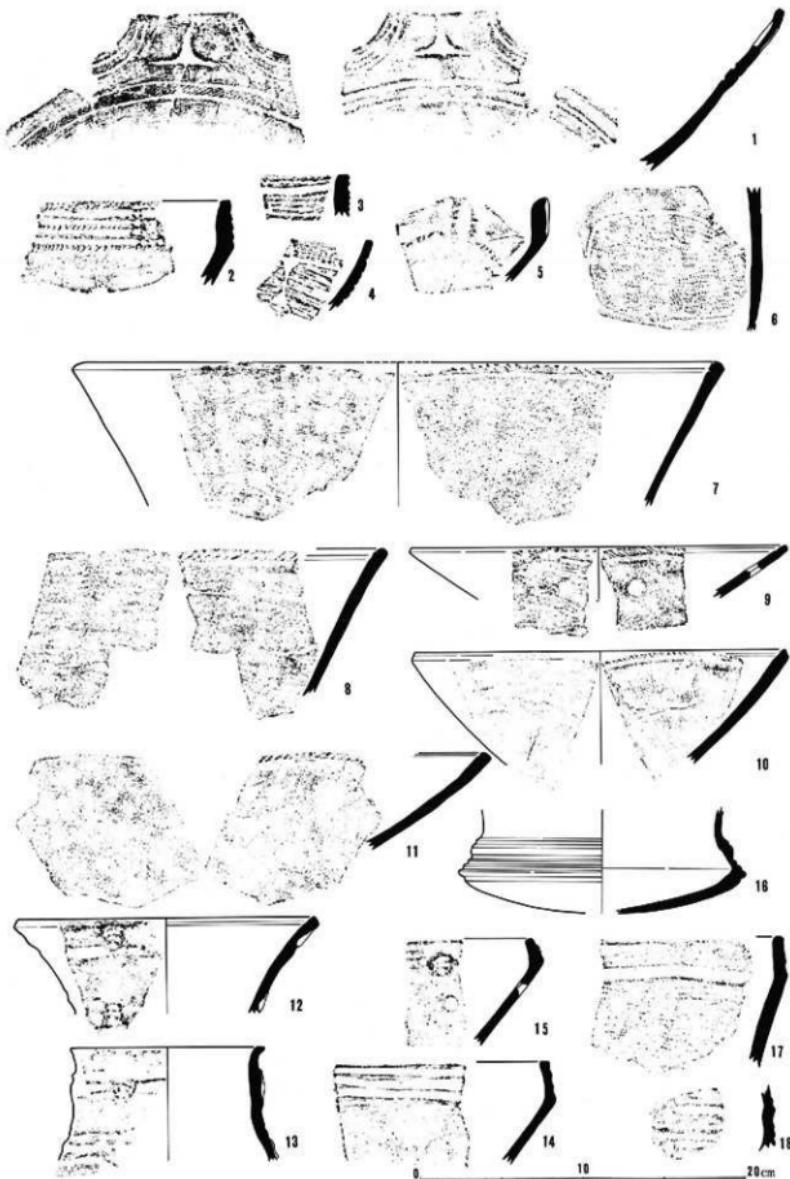


0 10 20cm

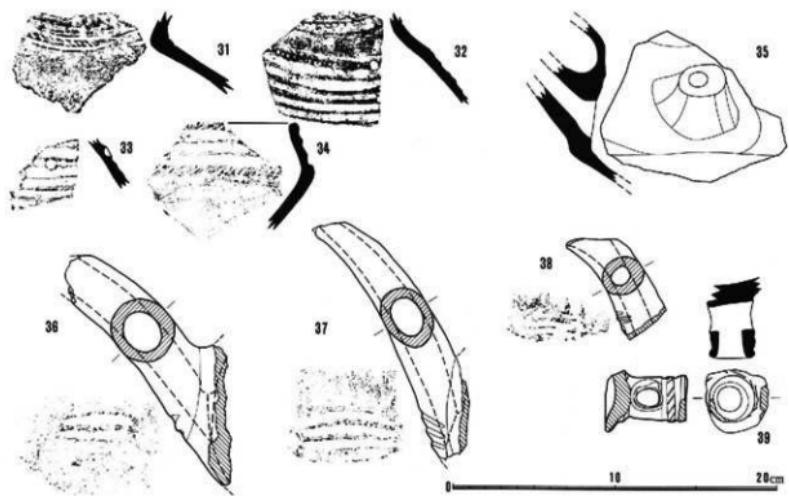
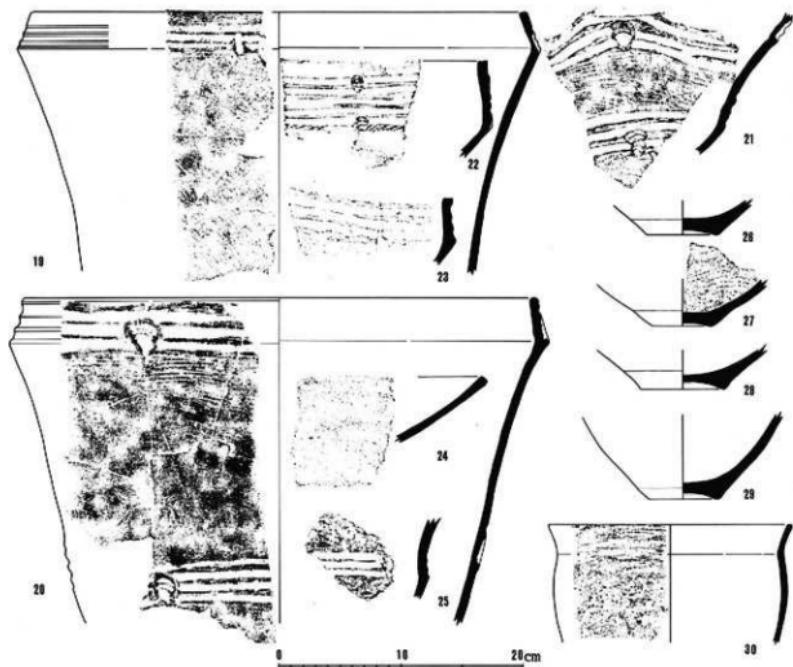
図版二〇 今津町構遺跡・土器実測図(2)



圖版二 今津町北仰西海道遺跡・縹文式土器実測図(1)



図版二二 今津町北仰西海道遺跡・縄文式土器実測図(2)



## 第2章 愛知郡秦荘町毛入堂遺跡

## 1. はじめに

本調査は、滋賀県が行なう県営は場整備事業暗渠排水工事（牧野工区）に伴うものである。毛入堂遺跡は以前から遺物の散布が周知され、昭和54年度当地には場整備事業が施行されることになり、本教育委員会では事前に調査を実施している。

その時の調査は排水路予定地にトレントを設定し、遺構・遺物の確認を行ない、水田となるところは遺構を保存することで協議され、トレントの拡張はなされなかった。調査の結果、掘立柱建物（倉庫跡）や溝、焼土等が検出され、古墳時代後期から平安時代の土器とともに数点の瓦片も出土した。瓦類は南西に隣接する軽野遺跡からの流入品とみられる。また、特異な遺物としては旧石器のチャート製ポイントが2点出土している。

今回の調査は、前回保存された地区に暗渠排水溝が設施されることから、工事実施前に発掘調査を行ない遺跡の保存策を講じることを目的としている。

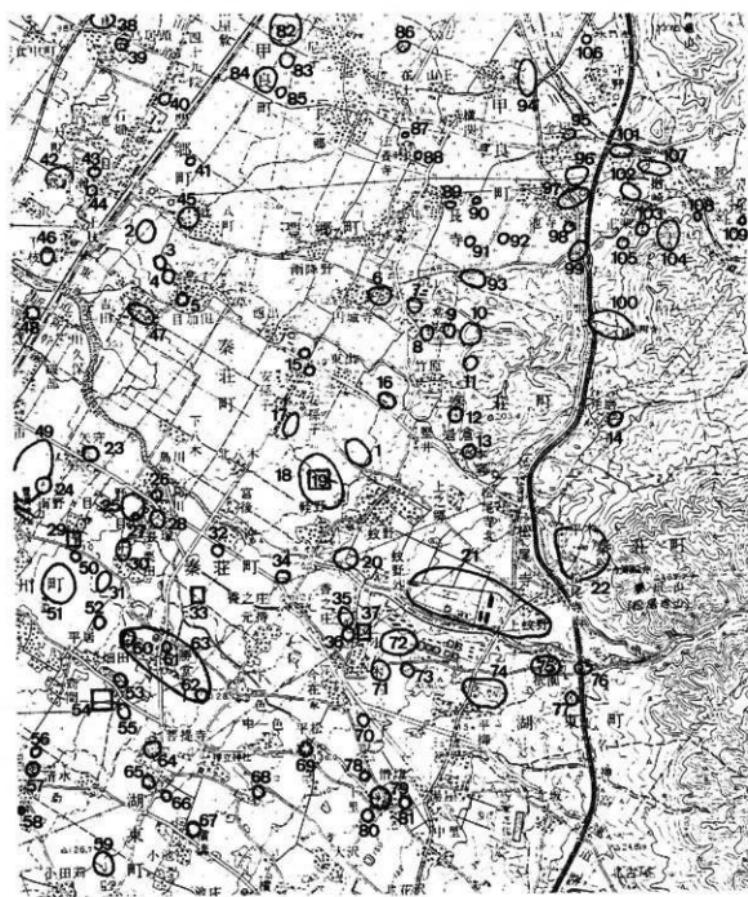
当該地は全域は場整備完了地区であるため、前回の調査で注意された南北方向を基準にもつ畔地区の位置を追求することはできず、また、旧地形を復元することも困難であった。

調査は文化財保護課が県農林部耕地建設課より予算（4,440,000円）の再配当をうけ、財団法人滋賀県文化財保護協会へ委託して実施した。

なお、調査および整理は地元秦荘町教育委員会へ依頼し、同教委社会教育課技師林 定信を担当者として調査を実施した。また、調査を行なうにあたり地元牧野の役員、土地所有者の方々にお世話になった。

現地調査および整理・報告には、岐阜経済大学学生青山謙治、円城伸彦、北川真也、沢田具高、近畿大学学生畠田良樹、東京電気大学学生深尾明広の協力を得た。

ここに記して謝意を表します。



第1図 毛入堂遺跡位置図および周辺の道路 ( $S = 1/5000$ )

| 〈東 莊 町〉           |             |            |              |  |
|-------------------|-------------|------------|--------------|--|
| 1. 毛入堂遺跡          | 32. 塚 越遺跡   | 58. 大 塚遺跡  | 88. 法養寺遺跡    |  |
| 2. 古 尸遺跡          | 33. 元 持遺跡   | 59. 小田刈遺跡  | 89. 長 寺遺跡    |  |
| 3. 日加田城遺跡         | 34. 狐 墓遺跡   | 60. 北 浦遺跡  | 90. 二 博遺跡    |  |
| 4. 竹之尻遺跡          | 35. 妙圓寺遺跡   | 61. 勝堂横穴遺跡 | 91. 横 枕遺跡    |  |
| 5. 目加田遺跡          | 36. 人蔵塚遺跡   | 62. 下一色遺跡  | 92. 四ツ塚遺跡    |  |
| 6. 常安寺北遺跡         | 37. 小八木庵寺遺跡 | 63. 勝 堂遺跡  | 93. 四ヶ丘遺跡    |  |
| 7. 二子塚遺跡          | 〈豊 鄭 町〉     |            |              |  |
| 8. 常安寺遺跡          | 38. 安食北遺跡   | 65. 菩提寺遺跡  | 95. 金屋北遺跡    |  |
| 9. 常安寺南遺跡         | 39. 安食西遺跡   | 66. 南菩提寺遺跡 | 96. 金屋南遺跡    |  |
| 10. 高坪山遺跡         | 40. 那須城遺跡   | 67. 平 塚遺跡  | 97. 外 輪遺跡    |  |
| 11. 光林寺遺跡         | 41. 石 烟遺跡   | 68. 鍋 塚遺跡  | 98. 振之内遺跡    |  |
| 12. 竹原谷遺跡         | 42. 高野瀬城遺跡  | 69. 平松城遺跡  | 99. 寺 道遺跡    |  |
| 13. 金台寺遺跡         | 43. 大 塚遺跡   | 70. 今庄家遺跡  | 100. 西明寺遺跡   |  |
| 14. 斧 磨遺跡         | 44. 帝釈寺遺跡   | 71. 小八木遺跡  | 101. 金 屋遺跡   |  |
| 15. 安孫子遺跡         | 45. 八町城遺跡   | 72. 木戸口遺跡  | 102. 正乗寺遺跡   |  |
| 16. 深 田遺跡         | 46. 観音堂遺跡   | 73. 小八木東遺跡 | 103. 勝樂寺山遺跡  |  |
| 17. 燐 保遺跡         | 47. 吉田城遺跡   | 74. 平 柳遺跡  | 104. 勝樂寺山城遺跡 |  |
| 18. 犬 野遺跡         |             | 75. 神 園遺跡  | 105. 狐 塚遺跡   |  |
| 19. 軽野遺跡(軽野塔 / 塚) | 〈愛知川町〉      |            |              |  |
| 20. 軽野正境遺跡        | 48. 山 塚遺跡   | 77. 新 池遺跡  | 〈多 賀 町〉      |  |
| 21. 金剛寺野遺跡        | 49. 市 遺跡    | 78. 天 神遺跡  | 106. 大門池南遺跡  |  |
| 22. 金剛輪寺遺跡        | 50. 塚 原遺跡   | 79. 下 里遺跡  | 107. 橋 崎遺跡   |  |
| 23. 矢守城遺跡         | 51. ミグルシ遺跡  | 80. カイゴメ遺跡 | 108. 榆崎東遺跡   |  |
| 24. 矢 守遺跡         | 52. 平居北遺跡   | 81. 僧 坊遺跡  | 109. レイコウ寺遺跡 |  |
| 25. 大間寺遺跡         | 53. 烟山北遺跡   | 〈甲 良 町〉    |              |  |
| 26. 練恩寺遺跡         | 54. 烟 出遺跡   | 82. 尼 子遺跡  |              |  |
| 27. 長 塚遺跡         | 55. 烟山稻荷遺跡  | 83. 尼子南遺跡  |              |  |
| 28. 烏 川遺跡         |             | 84. 下之郷南遺跡 |              |  |
| 29. 野々日遺跡(野々日廃寺)  | 〈湖 東 町〉     |            |              |  |
| 30. 粟 田遺跡         | 56. 塚 原遺跡   | 85. 下之郷遺跡  |              |  |
| 31. 粟 田遺跡         | 57. 瑞光寺遺跡   | 86. 在 子北遺跡 |              |  |
|                   |             | 87. 宮 後遺跡  |              |  |

## 2. 位置と環境

毛入堂遺跡は、滋賀県愛知郡秦荘町大字蚊野字毛入堂に所在する。当地は宇曾川の右岸に位置し、宇曾川によって形成された扇状地と斧磨・岩倉からつづく扇状地の交叉点付近にあたり、標高約116mを測る湧水地帯である。

以前は扇状地を開墾して水田とした地形を眺望することができたが、今は画一的な水田をみるだけで、小字名も番号化し、旧小字を求めるることは至難のわざである。遺跡の目印としては秦荘町立東小学校前から南西にのびる第1号幹線道路と第2号幹線道路の交叉する南側に遺跡は拡がり、そこに農業用水中ポンプがある。

遺跡は約300mの直径をもつ円形の約70,000m<sup>2</sup>の規模をもつと推定されている。その南西に位置する絨野寺は過去2回の調査で奈良時代初頭から平安時代後葉まで存続した寺院跡と考えられ、1.5町<sup>①</sup>の寺域を保有していたと推定されている。さらに、第1次調査では寺域の南側から古墳時代の方形周溝墓や集落跡も確認されている。<sup>②</sup>

古墳時代の集落跡は他に絨野正境遺跡<sup>③</sup>があり、その東方には湖東地方を代表する金剛寺野古墳群（約30基）<sup>④</sup>が位置する。また、当遺跡北東の竹原にも竹原谷古墳群（2基）や常安寺に二子塚古墳群（約10基）がある。これら古墳群は古墳時代後期の所産とされている。さらに、当遺跡北東の東小学校付近には深田遺跡があり、弥生時代から平安時代の遺物を出土する。

これら、絨野正境遺跡、絨野遺跡、毛入堂遺跡、深田遺跡を結ぶラインは標高115m前後にそれぞれ立地し、人々の生活の場であった集落が形成されていたことをうかがい知ることができる。そして、古墳群はその東方の山麓近くに構築されている。これは、この地が「和名抄」でいう八木郷の中心地であったことを示唆するものとして注目される。

古事記開化天皇の条に「沙文毘古弟、袁邪本王者葛野之別、近淡海、蚊野之別」とあり、蚊野之別を当蚊野に比定している。また、天平宝子6年5月の正倉院文書には愛智郡蚊野郷とあり、東大寺の寺領となっている。この蚊野には愛智郡を本拠地とする愛智楽氏と肩をならべる絨野氏の本拠地に推定され、上記の諸遺跡との関係が注目される。



第2図 毛入堂遺跡調査地位置図

### 3. 調査

#### 1 調査経過

本調査においては、基本的に暗渠排水路設施部分のみを調査対象としたため、調査の割付けは便宜的に現水田畦畔の北東～南西軸の一つを基準に取り、各水路のほぼ中心に1本の軸がもうけられるよう割付け杭を設定した。

重機による掘削は、まず耕土を3～4m幅で取り除き、その後幅1m程度深掘を実施して遺構面を検出するという方法で2段階に分けて行ない、耕作土と下部土の混合がおこらないよう注意して行なった。

遺構は、調査地の北西部の標高の低い地域を中心に検出され、南東部においては場整備時における削平が認められ、明確な遺構は確認できなかった。ただ調査地の北部においては、川状の遺構が認められ、2次堆積ながらその埋土中よりかなりの遺物が出土した。この川は、旧地形図等よりは場整備以前においても小規模ながらその存在が認められ、その形状をかえながらもかなりの期間存続したのではないかと考えられる。

#### 2 調査日誌（抄）

10月12日 本日より、愛知郡秦荘町蚊野、毛入堂遺跡の発掘調査を開始する。ユンボによる掘削に先立ち、トレント位置の設定を兼ねて、基本的な割付け杭の位置を決める。

10月13～17日 ユンボによる掘削作業を南西地区より始める。107号水田においては、107-Aトレントを中心ピット、溝跡などが多数検出された。遺物も須恵器、黒色土器、縁釉陶器と種々のものが出土した。

10月18日 104-Cトレントより石仏出土。

10月19日 ユンボによる掘削作業北東地区（118号水田）に移動する。

10月20日 118-Cトレントにおいて、土器滴りを検出。一部拡張を行なったがどのような遺構になるかは、明確にできなかった。須恵器：魁、甕、杯、土師器：甕、鉢などが出土した。7世紀前半ぐらいの土器が多く認められたが、6世紀後半から11世紀ぐらいまで種々の時代の土器が混在していた。

10月21～25日 ユンボによる掘削作業続行。調査地北部においては、川状の遺構（幅10～20m）が南から北に流れるように検出された。

10月26～28日 118-Aトレントより遺構検出作業を開始する。溝跡、ピット等が確認された。

10月29日 118-Dトレント、118-Cトレントの遺構検出作業。118-Cトレントの土器滴り遺構掘り下げ作業。

11月1～5日 118-Aトレント遺構掘り下げ作業。

11月8日 118-Cトレント遺構掘り下げ作業。

11月9日 118-Cトレント全体写真。調査地の北東地区（118号水田～114号水田）における実測用割付け作業開始。

11月10～11日 118-A、118-C両トレント平面実測作業。

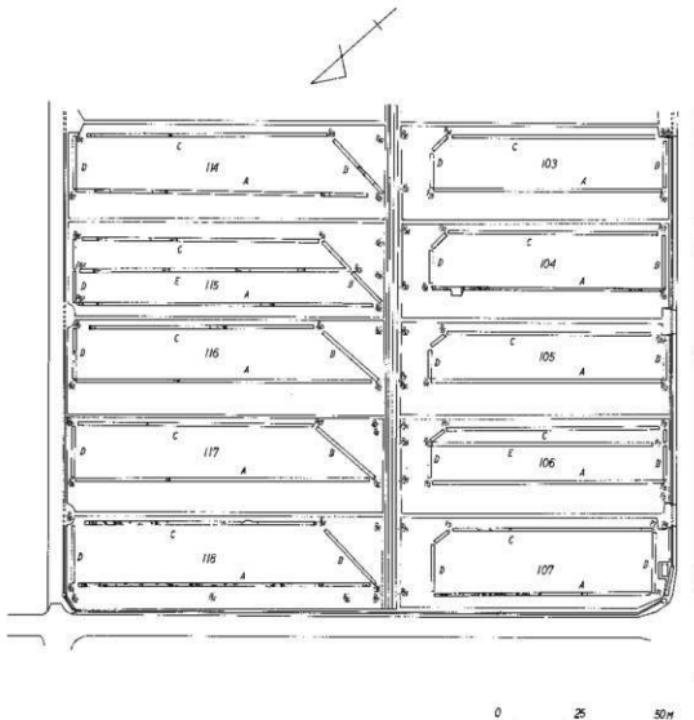
11月12日 118-Dトレント断面実測作業。116号、115号、114号水田水抜き作業。

11月15～16日 118-A、118-C両トレント断面実測作業。116号水田水抜き。

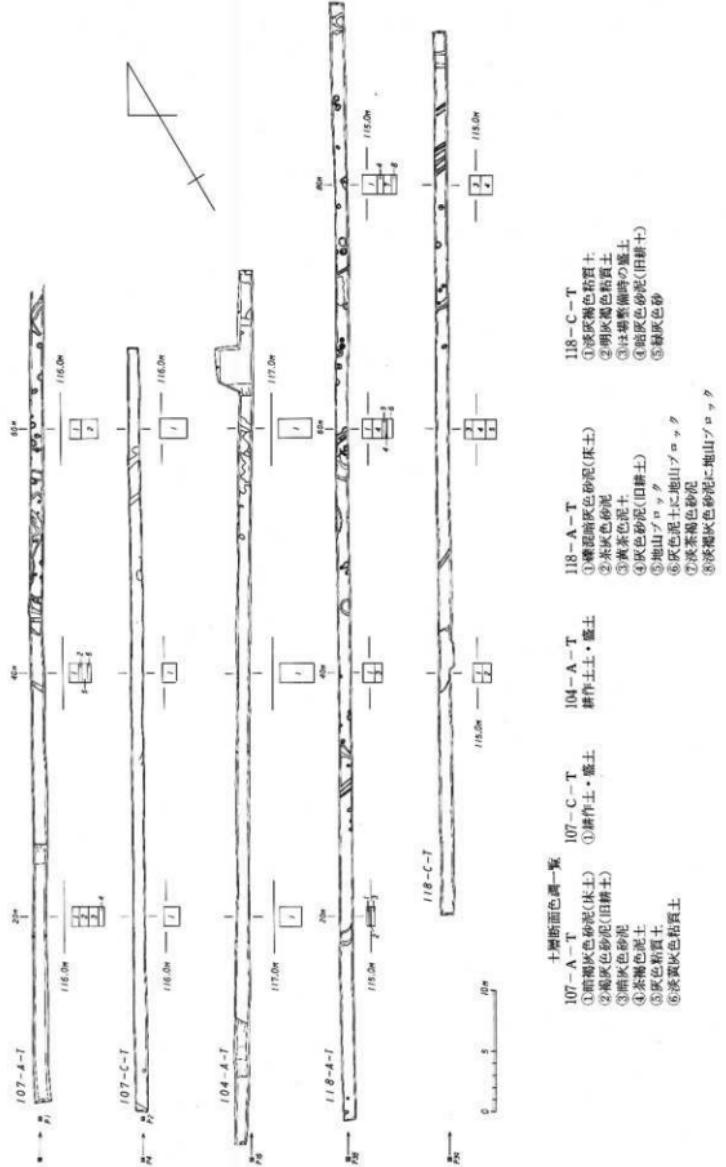
11月17～18日 調査地中央部実測用割付け作業。

11月19日 116-Aトレント遺構検出作業。

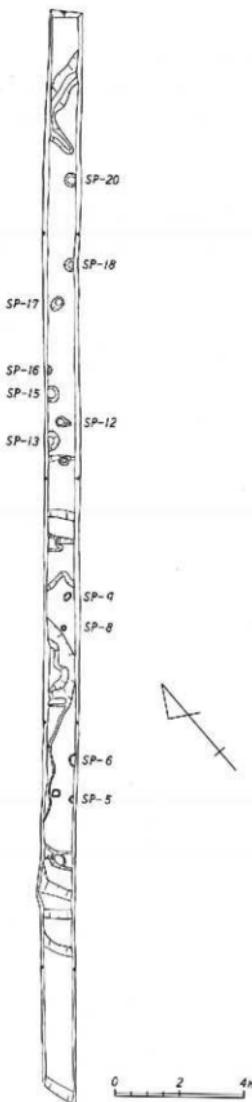
11月22日 115-A トレンチ水抜き作業及び遺構検出作業。  
 11月24～26日 115-A トレンチ遺構検出作業。116-C トレンチ水抜き作業。  
 11月29～30日 115-A トレンチ断面実測作業。  
 12月1～3日 114号水田水抜き及び断面実測作業。  
 12月6～13日 107-A トレンチ水抜き、遺構検出作業及び平面実測作業。  
 12月14～19日 104-A トレンチ遺構掘り下げ作業及び平面実測作業、断面実測作業。  
 12月24日 ユンボによるトレンチ埋め戻し作業開始。  
 昭和59年1月10日 117号、116号水田水抜き作業。  
 1月14～18日 ユンボによるトレンチ埋め戻し作業（117号水田）。  
 1月26日 ユンボによるトレンチ埋め戻し作業。  
 2月27日 ユンボによるトレンチ埋め戻し作業。  
 3月6～16日 ユンボによるトレンチ埋め戻し作業。  
 3月17日 本日をもって現地作業をすべて完了する。整理作業及び報告書作成業務に専念する。



第3図 毛入堂遺跡トレンチ配置図



第4図 毛堂遺跡遺構図および柱状図



第5図 毛入堂遺跡107-Aトレンチ  
北東部遺構図

#### 4. 毛入堂遺跡小結

検出された遺構は、調査地の北西地区を中心にピット、溝跡等である。今回はトレンチ調査のため遺構の性格等は十分把握できなかったが、107-Aトレンチ付近を中心に掘立柱建物なども形成されていたものと考えられる。時期は、出土遺物から、古墳時代後半から中世にかけてである。調査地の東地区においては、古代より最近までその形状を変えながらも存続した川跡が確認されただけで、ピット等の遺構はあまり検出できなかった。

##### 1. 107-A トレンチ（第4図、第5図）

調査地の西端に位置するトレンチで、北東側を中心にピット、溝跡などが検出された。

S P-15より、黒色土器、土師皿がまとめて出土した。包含層出土の土器の中には古墳時代後期にまで遡るものもあるが、遺構の時期としては、このS P-15出土の土器に代表される時期を中心である。

##### 2. 107-C トレンチ

床土の下面は直ちに地山に移行する。東西に走る溝状の掘り込みが2条検出された。残存状態は悪く、遺物も包含していない。

##### 3. 104-A トレンチ

床土と地山の間に、幅10~40cm程の擾乱層が見られ、須恵器甕などが少量混入していた。遺構は、北東側を中心にピット・溝状の掘り込みが若干検出された。

##### 4. 118-A トレンチ

東西に走る溝およびピット・土壤がトレンチ全面にわたって検出された。遺構面と床土との間にかなり擾乱を受けた包含層があり、須恵器甕、壺、土師器、近世陶器などの出土がみられた。遺構とともに土器は6世紀後半ぐらいに比定される須恵器壺の他、少量の土師器だけである。

##### 5. 118-C トレンチ

東西に走る溝が7~8条、若干のピットが検出されたほか、南西部において遺構形態は明確ではないが、土器滴りが検出された。この土器滴りは、昭和54年度当地において施行されたは場整備事業の際に、この付近にあったと思われる遺構からの削平流入と考えられ、出土遺物の時期もかなりばらばらで、出土土層も比較的上層に集中していた。

ほぼ東西に走る溝は、は場整備以前にこの付近に一部みられた東

る。

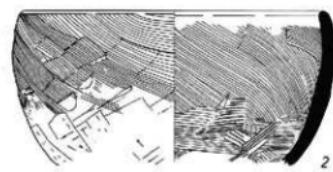
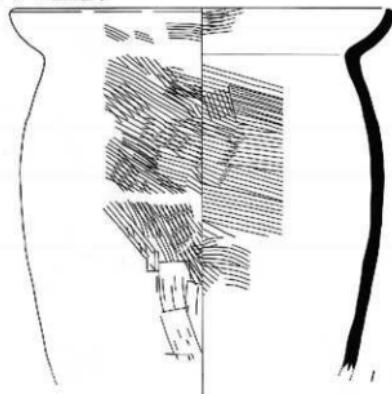
#### 6. 川状遺構

114-Cトレンチから118-Aトレンチまで、調査地北東部トレンチほぼ全体にわたってみられ、およそ南から北に向かって流れているものと思われる。埋土下層からは6世紀後半から7世紀前半にかけての遺物が中心に出土している。この川は、その規模がかなり小さくなりながらも近年まで存在していたようで、は場整備がなされる以前の旧地形図にその痕跡が認められる。

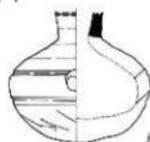
#### 7. その他のトレンチ

上述以外のトレンチにおいては、まれにピット等が検出される以外は、明確な遺構は確認できなかった。調査地北西部の比較的標高の低い所に遺構が集中しており、調査地南東部においては、一部遺構面の削平が認められた。

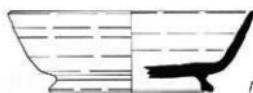
118-C-T 土器添り



118-A-T



10

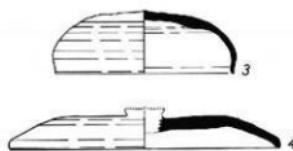


11

106-B-T



13



3



4



5



6



7



8



118-C-T



12



14



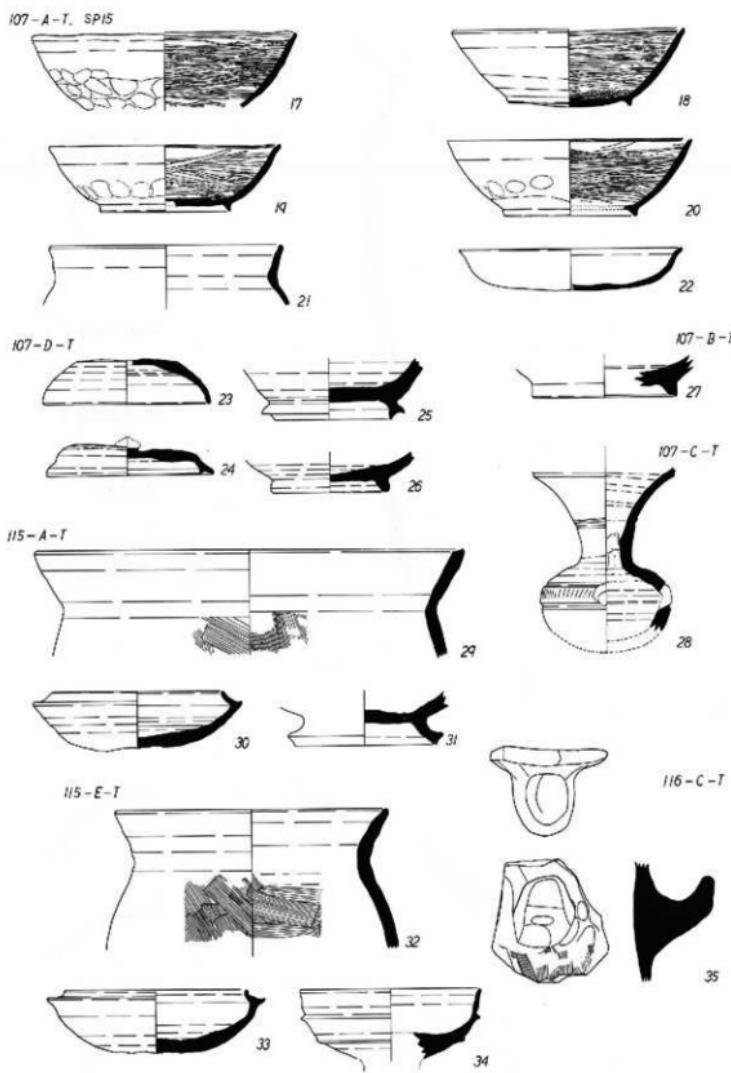
15



115-D-T



第6図 毛入堂遺跡出土遺物実測図



0 5 10 15cm

第7図 毛入堂遺跡出土遺物実測図

## 5. 遺物

遺物は当該地のほぼ全域より出土した。出土遺物は須恵器、土師器、陶磁器、石製品などである。この中で実測可能なのは約35点を数え、時期的には古墳時代後期から平安時代末期にかけてのものが中心である。ここでは、遺物を出土トレンチ（および出土遺構）ごとに記述することにする。

### 1 遺物（第6～8図、図版5・6）

104-Cトレンチ 石仏(38)が1体倒立状態で包含層より出土した（cf・図版3）。この石仏は花崗岩製の板碑で、総高51.1cm、最大幅27.3cm、像高27.9cmを測る。頭部の髪形および手先の印相（上品上生印？）などより、阿弥陀仏の可能性がある。

106-Bトレンチ 灰釉壺(13)がある。口径15.9cm、器高5.3cmを測る。

107-Aトレンチ・S.P.-15 黒色土器5点(17~21)、土師皿(22)がまとめて出土した。

黒色土器塊は、いずれも口縁外面および内面のみ黒色で口径は14.1～16.2cm、器高は4.1～4.8を測る。口縁内外面は横ナデ、内面は横方向の丁寧な細かい鎌ミガキがほどこされている。体部外面は指圧痕が明瞭に認められ、粗い横ナデが加えられている場合もある。高台は、はり付けで断面三角形の小形のものである。口縁内側に沈線が1条入る。胎土は精良で、焼成も良好である。

土師器皿は口径13.7cm、器高2.6cmを測る。体部はゆるやかに内窪し、口縁部で外反し端部は丸くおさめられている。底部は指圧調整であるが、他は横ナデ調整である。胎土・焼成とも良好である。

107-Cトレンチ 須恵器罐(28)が包含層より出土している。やや扁平球形の体部に細めの頭部がつく。頭部に2条、体部に2条の凹がつく。体部四凹線間に笠刻目を密接して斜めにめぐらしている。

107-Dトレンチ 須恵器4点(23~26)がある。23は环蓋で口径10.2cm、器高2.7cmを測る。24は擬宝珠形のつまみを有する环蓋で口径10.2cmを測る。天井部は比較的平らで外傾して口縁に至り、口縁部はなだらかに外窪した後外傾しつつ端部に至る。内面天井部は、回転ナデの後直線ナデがほどこされている。胎土・焼成とも良好である。

114-Cトレンチ 須恵器环蓋2点(14・15)がある。ともに川跡の下層よりの出土である。环蓋14は天井部と口縁部との境に明確な棱を作らず、口縁部はほぼ垂直に下がり端部はやや丸みを帯びている。外面天井は笠削りのみで調整、他は回転ナデ調整、胎土・焼成とともに良好で青灰色を呈す。15は擬宝珠様のつまみを有している。丸みを帯びた天井部からなだらかに外窪しつつ口縁に達し、垂直に下り端部に至る。内面に鋭いかえりを有している。胎土・焼成とともに良好で灰色を呈す。天井部外面全体にわたって自然釉がかかっている。

115-Aトレンチ 土師器(29)、須恵器(30・31)がある。すべて川跡よりの出土である。土師器甕29は類部にあまりくびれがなく、口縁端部は外上方につまみ出されている。口縁部内外面は刷毛後横ナデがほどこされている。焼成は良好で淡灰褐色を呈す。口径26.4cmを測る。須恵器30は环身でたちあがりは内傾して長くのび端部は丸く、受部はやや上方へのびる。調整は底部外面は回転笠削り、内面は回転ナデの後直線ナデがほどこされている。他の部分は回転ナデ調整。胎土・焼成とともに良好で灰色を呈し、底部外面全体にわたって自然釉の符着がみられる。31は竈の類の底部と考えられる。25に比較すると高台高は低いが、ハの字形のしっかりした高台である。底部は平らに仕上がっており。

115-Dトレンチ 須恵器の环蓋(16)が包含層より出土した。天井部上位は比較的平らになっており、外反して下りさらに内窪ぎみに外反する。口縁部は内窪した後外下方に下り、内傾して端部に至る。端部は鋭い。



第8図 毛入堂遺跡出土石仏実測図

天井部上位は窓削り後不整方向のナデを少しほどこしている。焼成はやや甘い。口径は10.2cm、器高は3.3cmを測る。

115-E トレンチ 土師器(32)、須恵器(33・34)がある。すべて川跡中よりの出土である。32は口径16.6cmを測る壺で、体部は外面が斜め方向の、内面が横方向の崩毛をほどこされており、口縁部は崩毛後横ナデ仕上げになっている。胎土・焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。

須恵器34は口径11.1cmを測る無蓋高杯で、外傾する口縁がやや外反ぎみに端部へ上がっており、端部はやや丸みがある。口縁部と体部は丸みのある後によって分けられ、体部と底部に突出度はあまりないが鋭角的な棱によって分けられている。胎土・焼成ともに良好で灰色を呈する。

118-A トレンチ 包含層中より2点の須恵器(10・11)が出土している。10は、やや扁平球形の体部に細い頭部がつき、体部肩部および下部にそれぞれ1条の凹線がつく。頭部下位に凸線を有す。底部は窓削りおよび粗い指圧によって調整されており、他の部分は回転ナデにより調整されている。胎土・焼成とともに良好である。最大径は8.75cmを測る。11は高台のつく环身で口径15.0cm、器高5.0cmを測る。口縁部は外傾してのび端部は丸くおさめている。底端部より1/5内側に高台を付す。高台はやや内傾し外側で接地する。外底部は回転窓削りにより調整されており、他の部分は回転ナデ調整であるが、内底部には直線ナデが加えられている。焼

成は良好で淡灰色を呈す。

118-C トレーナー・土器溜り 土器器(1・2)、須恵器6点(3~8)がある。時代的にはかなり混在が認められるが、7世紀初頭から後半にかけての遺物が多くこの土器溜りより出土した。土器器1は口径23.8cmを測り、胴部最大径が口径とほぼ同じかそれ以下の長胴の壺になる。口縁部は内寄して立ち上がり、頸部はあまりくびれない。調整は全体的に刷毛であるが、口縁部および頸部は刷毛の後横ナデ調整が加わる。また胴部外面上位は窓削りによる調整が行なわれている。胎土・焼成ともに良好で淡灰色を呈する。外面下位に媒の付着が見られる。2は土器器鉢で、口縁部はやや内寄し深みがある。口縁部は刷毛の後横ナデ、外面上位は斜めの刷毛、下位は窓削り、内面は斜め方向の肩毛の各調整がどこされている。口径は19.0cmを測る。

須恵器杯蓋3は口径11.0cm、器高3.9cmを測る。天井部は平担に下傾しているが、口縁部は内寄ぎみに下方に開いた後垂直において端部に達しており、全体的にやわらかい感じを受ける。胎土・焼成とも良好で淡灰色を呈する。4は擬宝珠様のつまみがつく杯蓋と思われる。天井部は平らに仕上っており、外下方に下った後短い口縁部に到る。端部は丸い。杯身5は高台を有しないもので口径11.6cm、器高3.9cmを測る。6・7は高台がつく杯身である。調整としては、内底面は回転ナデに直線ナデが加えられており、外底面は窓削り整形されている。胎土は共に良好であるが、7は焼成が幾分甘くやや軟質である。

## 2. 小結

今回出した遺物は、明確な遺構にともなったものが少なく、107-A トレーナーのSP-15出土の黒色土器群程度である。

SP-15出土の土器群を除くと、時期的には6世紀後半から11世紀くらいにまたがる。

SP-15出土の土器群は、12世紀中頃あるいはもう少し古い段階に比定されていると考えられる。黒色土器塊は口縁外面および内面に炭素を付着させていて、窓ミガキは内面のみであるが細かく丁寧に行なわれている。

## 6. ま と め

今回の調査の結果、調査地の北西側を中心に遺物の包含層や遺構を検出した。調査地南東地区においては川跡を除いて明確な遺構は検出できなかった。ただこのことだけから遺跡の広がりが、調査地の北西側にのみ偏ると考えるのは早急に過ぎるようで、遺物の出土状態から判断すると南東地区にも存在した遺構が、は場整備時に一部削平を受けて、結果的にこのような状況になっているものと思われる。従って毛入堂遺跡は、当該地区からは四方すべての方向にさらに拡がって存在するものと考えられる。

ただ今回の調査では、小字名「毛入堂」に直接関係すると思われる遺構・遺物は確認できなかった。平瓦が1片出土したが、これは当地の南に位置する軽野（軽野塔ノ塚）遺跡からの流入と考えられる。

当調査で明らかになった事は、①古墳時代後期から平安末期にかけての遺跡の存在：今回の調査では明確な遺構こそ確認できなかったが、出土遺物などからこの付近にこの時期の遺構が存在することは明らかである。

②12世紀中頃の遺構の存在：107-Aトレンチのピット群は、南北方向を1つの軸にする建物になる可能性がある。調査地面地区的他のトレンチからもS-P-15出土の土器に並行する時期の遺物の出土がみられ、調査地西側を中心にこの時期の集落跡の存在を示唆しているようである。

いずれにしても、今回の調査の目的が毛入堂遺跡の保存策を講じる事と共に、遺跡の広がりの確認にあったことを考えると、これらの結果は当初の目的を十分果たしているのではないかと考えられる。

### 註

- ① 昭和53年発掘調査（第1次調査）

葛野泰樹「愛知郡秦荘町軽野遺跡」（『は場整備関係遺跡発掘調査報告書』X-1、滋賀県教育委員会（財）滋賀県文化財保護協会 昭和53年）

- ② 近藤 淳・石橋正嗣・石原道洋「軽野正塹遺跡発掘調査報告」（秦荘町教育委員会 昭和79年）

- ③ 田中勝弘・近藤 慎「愛知郡秦荘町コヨ敷地内古墳調査報告」（『滋賀県文化財調査年報』昭和48年度滋賀県教育委員会 昭和50年）

近藤 淳「秦荘町上蚊野古墳群」（『は場整備関係遺跡発掘調査報告書』IV-2、滋賀県教育委員会（財）滋賀県文化財保護協会 昭和52年）

近藤 淳・藤川清文他「秦荘町上蚊野古墳群」（『は場整備関係遺跡発掘調査報告書』V、滋賀県教育委員会（財）滋賀県文化財保護協会 昭和53年）

- ④ 滋賀県教育委員会文化財保護課 宮本忠雄主査の御教示による。

- ⑤ 葛野泰樹・山中仁志「大開寺遺跡発掘調査報告書」（滋賀県教育委員会（財）滋賀県文化財保護協会 昭和82年）

- ⑥ 田辺昭二「陶邑古窯址群」（1966）

- ⑦ 中村 浩・他「陶邑」～背」

- ⑧ 大橋台弥・谷口 徹・別所龍二「久野部遺跡発掘調査報告書」一七ノ坪地区（滋賀県教育委員会 野洲町教育委員会（財）滋賀県文化財保護協会 昭和77年）

葛野泰樹・猪飼克己「市遺跡発掘調査概要！」（受知川町教育委員会（財）滋賀県文化財保護協会）

小倉 勝・他「和気遺跡発掘調査報告書」（和氣遺跡調査会 昭和79年）



1 調査地遠景（東から）



2 調査地掘削作業風景



1 115-A トレンチ（北東から）



2 107-A トレンチピット群（北東から）



1 118-A トレンチ (北東から)



2 114-C (西から)



1 118-C トレンチ土器溜り（南から）



2 104-C トレンチ石仏出土状況

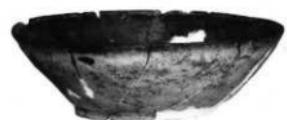


4



7

1



18



2



23



17



25



22



26

1・2・4・7, 118-C-T 17・18・22, 107-A-T・ピット15  
23・25・26, 107-D-T 36, 107-C-T

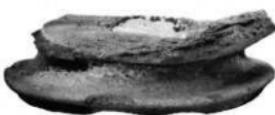
15



10



31



11



37



12



14



16



33



38

10・11, 118-A-T 12, 118-D-T 14・15, 114-C-T 16, 115-D-T  
31, 115-A-T 33, 115-E-T 37, 114-A-T 38, 石仏

昭和59年3月

は場整備関係遺跡発掘調査報告 XI-2

編集 滋賀県教育委員会

発行 滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

印刷 有限会社 真陽社

京都市下京区油小路仏光寺上ル

TEL. (075)351-6034